哀れさは花に無緣の念佛哉

眞照寺の櫻を見る

しらか迚や尾張樓に寺參り

明治維新廢寺となれり、（尙ほ天滿神社の條參照）

三、智白山天溪寺

天溪寺、宮津町小川町にあり、青面金剛坐像（傳智證大師作）を本尊とす、元祿七年五月元享法印開基以來醍醐之寶院末の修驗道にて累代山伏之れに住せり。

宮津府志曰

寶泉院　卽庚申堂別當　在小川町

修驗派　醍醐三寶院末岩瀧邑傳宗院帳下

本尊　青面金剛

御領分寺社集覽曰

京都醍醐三寶院末派

山伏　庚申之別當

小川町　智白山　寶泉院　天溪寺

當寺院世代

開山　權大僧都元享法印　元祿七戊年三月廿二日

二世　權大僧都元盛法印　享保十八丑年七月二十二日

三世　權大僧都元秀法印　寛延四未年二月廿五日

四世　權大僧都快享院快泉法印　寛政五丑年三月十八日

五世　大越家實泉院泉山法印　同　年四月二日

六世　權大僧都實泉院元盛法印　弘化二辰年十一月五日

七世　寶泉院元峰法印　安政六未年十一月廿七日

以下不明

當時什寶として文明年間智海僧都の不動尊像一幅及び傳本田善光彫刻青面金剛判木一枚あり、堂前石燈籠一基銘天明八申十月鹽見氏とあり。

この他小川町より金屋谷にかけては役行者を奉ずる山伏修驗多く、御領分寺社集覽にも

本山修驗　天臺宗聖護院家若王子末

御城下金屋谷　永福寺大行院

同　新町　善性院

同　金屋谷　圓壽院

當山修驗　醍醐三寶院末派

御城下小川町　天溪寺寶泉院

同　小川町　圓妙院

同斷　小川町　成福院

此の內寶泉院は前項の如く天溪寺として廢寺に垂んたるも今存し、金屋谷永福寺大行院は丹哥府志に行者尊の別當と錄せるものなるが一時界隈を風靡したる由なるも後頹れ、善性院は新町にありて秋葉權現を奉じ丹哥府志に「秋葉の別當善性院」と錄するもの之れにして寶曆九年の寺社名前帳にも「聖護院派修驗城下新町善性院」と載するより見れば當時よりありしを知るべし、圓壽院また同帳「金屋谷圓壽院」の條あり文政年間宮津領內百姓一揆に連累の嫌疑を以て入牢中の栗原百助脫獄逃走の際藩命を奉じて足止呪咀を修したりとて有名なり小池松治著「文政實錄丹後百姓一揆」に曰

百助破牢を企て踪跡を晦ましたので宮津藩では百助が平素健脚家であるから遠方へ逃去らん內に搦め取なればならぬと云ふ方針で時を移さず八方へ手配りをして嚴重なる搜査を遂げたが行衛更に判明しない、其處で宮津藩に於ては種々協議の結果百助足止の策として金屋谷圓壽院小川町寶泉院、同圓妙院今福村地福院有田村赤山伏等の修驗者連を役所へ召喚して、

此度栗原百助儀破牢を企て何方へか逃走せり聞及ぶに其方等は修驗の祕法を以て種々なる奇効を顯す由今日此所へ呼出したるは餘の儀にあらず、百助儀非常なる健脚家なれば其方共の修驗法を以て彼が足部に異樣を生じ歩行の自由相叶はざるやう祈りを凝すべし。

と嚴かに申渡したので山伏共は大に長み奉り委細承知仕り候今日より五日內には必ず百助歩行相成りかたきやう取斗ひ申すべしと得意の鼻を蠢動して引下り直ちに圓壽院に寄集つて五名の修驗共齋戒沐浴し同院本堂に立籠つて夜となく晝となく濃々立昇る護摩檀內に怪しにな呪文を唱へつゝ不亂に祈りを懸けた斯くすること二夜三日であつた、然るに百助破牢以來素足の儘で岩また岩の嶮路離道を逃げ去る際足强か負傷した、其傷が日と共に次第に重くなり果ては歩行も叶はぬ苦境に陷り併かも夫れが因となつて終に江州八幡町の露と消えたのである、斯かれば百助の切腹は是全く修驗者等の祈禱感應の結果なりとして領民大に怒り「ウヌ惡山伏の修驗メ見付次第に撲き延せ打殺せ」日々に罵りわめき其山伏等が宮津町附近を徘徊しても誰一人として一錢の手の內は愚か孰れも申合せて惡口雜言を吐き散すより其後宮津町近邊へは少しも顏出しが出來なかつた云々。

固より講談的實錄ものにて多少の戲曲も加へあれば信を措くは如何の感なきにあらざるも俚老の話題に尙ほ存せり、圓妙院は天溪寺寶泉院の北隣にありしも維新後還俗して圓妙を姓とし院は廢れて今存せず、成福院は寶泉院の東方にありしも今院は無し享和二年より同三年に亙りて役行者尊を祀り大衆を會して柴燈護摩供を修したる護摩札は行者尊像と共に今如願寺にあり次の如し。

奉建立

大願主成福院現住阿闍梨快山舞鶴城外市中　宗傳院
近邦稱祈願檀家處受助志自享和二戌冬同三　天溪寺
至亥六月成就依之爲開元供養並國家安穩講　持福院
中檀家息災延命三日間柴燈護摩修者也矣

如役行者神變大菩薩佛師平安某　開元大衆

世話人

波見屋長七　山田屋長八　由良屋喜兵衛　圓壽院
倉屋清二郎　田中屋佐七郎　上田屋佐兵衛　善性院
眞柏屋市衛門　大工平五郎　神崎屋善六　龍藏院
伊根屋茂平治　松田屋半兵衛　石屋清二郎　大行院
油屋平治郎　左官助七　日引屋新治郎　小僧五人

宗傳院は岩龍、地福院は今福、龍藏院は有田にありしものといふ、成福院歷代中判明せるものは

阿遮梨養泉智讚法印　寶曆七子年十一月十一日
權大僧都阿闍梨快山法印　天保四巳年九月十二日

正大先達阿闍梨林光法印　　安政四巳年十月十二日

成福院實想常念　　明治九子年二月二十日

明治五年修驗宗還俗姓を福垣と稱して今町人となる。

四、淵龍山法光寺

法光寺は上宮津村の小田の關ケ淵にあり大日如來を本尊とし延暦年中棄世上人の開基なりといふ。

與謝郡誌　曰

淵龍山法光寺

上宮津村字小田の關ケ淵にあり本尊大日如來、開基棄世上人延暦年間創立といふ、當寺受持境外佛堂小字普甲寺に普賢堂あり固と普甲寺なりしとて今普賢菩薩を祀る、外に辨財天もあり。

第三款　曹洞宗寺院

一、松溪山智源寺

智源寺は宮津町字京街道にあり末寺六十三ヶ寺を有する中本寺なり、（寫眞參照）京極高廣公先妣慾持院殿松溪智源禪尼菩提の爲めに心庵禪師を招じて寛永二年に朱光庵を改めて創立する所なりとて京極家は勿論歷代藩主の優遇あり。

宮津府志　曰

松溪山智源寺　在宮津城下京街道

禪曹洞宗僧祿司

本尊釋迦如來　開山　心菴禪師

末寺六十七箇寺

寺記云當寺考寛永二乙丑年京極高廣公爲二先妣慾持院殿一建立也

按慾持院殿者京極高知公之室二而高廣公之母也、法名慾持院殿松溪智源大禪尼慶長十七年壬子四月五日卒當寺內亦在二五輪石燈一又當寺境內山林中有二京極高治之墳墓及京極家長臣落合氏伊木氏之石碑一高治一曰考高廣公二男一曰高春三男號二京極下總守高治一有レ故於二當寺一自殺時二慶安五壬辰年七月晦日法號清源院殿前端尹月泉宗秋大居士、高治自殺之時所レ建屏風在二當寺一猶有二血痕一

丹哥府志　曰

松溪山智源寺　曹洞宗僧祿司末寺六十七箇寺　大久保稻荷の次

松溪山智源寺は京極高廣の開基なり開山を心庵禪師といふ、元朱光庵といふ庵なり、寛永二乙丑年京極高廣妣慾持院殿の爲めに伽藍を建立す今の智源寺是なり、慾持院殿は京極高知の室高廣の母なり、慶長十七年四月五日卒し謚して慾持院殿松溪智源大禪尼といふ、よつて松溪山智源寺と號す其の終る處はいつれの地や詳ならん、今寺內に其の墓なりとて五輪あり高サ壹丈許三面に梵字を刻す其基石に法名並に年月を記す、其傍に京極高治及京極氏の臣落合伊木の二氏の墓あり京極高治は高廣の二男京極下總守といふ故あつて寺に來り自殺せしぬ伊木氏の墓に前大閤黃袍物史伊木有齋常紀と記す。

寺領に就ては寺社免除高取調帳に

智源寺

一、高壹石三斗壹升貳合

の條あり、古來乘物御免の寺格にて御領分寺社集覽に

乘輿の五ヶ寺御禮席書上

禪曹洞宗僧錄司

智源寺

一、御禮登城之節於冠木御門下乘仕致退出候迄乘物者其所に留置候事但京極家之時ハ於鐵門致下乘候。

また宮津藩年中行事正月の條

六日

一、智源寺ゟ大般若經轉讀之御札差上之

の記事を見る、寺院明細帳曰

曹洞宗　智源寺

一、本尊　釋迦牟尼佛並文殊普賢二菩薩

一、由緒　寛永二乙丑五月舊領主京極丹後守高廣爲先妣建立之以心庵盛悅爲開祖也

一、堂宇　桁行十二間梁行九間半

一、境内坪數　千四百四十八坪　民有地第一種

一、境内佛堂　二宇

觀音堂　太尊阿彌陀如來並西國三十三所觀音木像安置

辨天堂　木尊辨財天女

一、檀徒人員　二千二百人

智源寺住職　今子全英㊞

檀家總代　三原仙彌㊞

同　堀口祐衞門㊞

同　高岡佐四郎㊞

開山傳記面山禪師直筆一卷あり宮津鄕士誌に其要點を載せたり左に轉錄す。

開山心庵盛悅大禪師は天正元年正月元日越後に生れ上杉謙信の家臣本莊家某の二男なり江戸に於て圍碁の爭より人を討つて直ちに扈從澁谷といふを伴ひ逃れて京都に來り萬年山相國寺なる大智禪師に依て薙髮し佛門に歸す時に年十五爾來二十二年間四方に遊學して身には紙衣をまとひ拙　以て饑を忍び越後芋島に於て一翁老人に就き道を修め出羽の清水興源院豐寶舒禪師に投じて嗣法す後能登承持に住し移つて信濃太澤寺に居り又丹後洞光寺に來る後加佐郡田邊桂林寺に移る時に寛永三年にして年五十四、偶々領主京極丹後守高廣天橋山智恩寺に懇請す禪師彼の寺の豐祿と大觀あるを以て固辭して行かず高廣三請止まざれば禪師曰く三間の茅屋膝を容るゝを得ば卽ち足れりと高廣是に於て智源寺を建立して禪師を開山に仰ぐ一住十一年にして可山和尙に讓るも可山事により退院止むなく再住して翌年大法幢を建立す九年後又之を播州和尙に讓り中郡新治に十方院建て移り居り凡そ七年間にして自ら手を下して大藏經を全寫す三日間飲食せず無疾にして明曆三年五月二十二日座寂す時に享年八十五。

傳へ聞く當寺に於ては開山禪師の意を體し圍碁をなすを許さゞると托鉢を怠らざるの規定なりと。

寛政九年九月回祿の爲めに諸堂烏有に歸せしを文化元年三月十七世忍柔和尙之を再建し本堂、開山堂、禪堂、玄關、書院、山門、總門、石門、觀音堂、明王堂、鎭守堂、經藏等完備し末寺六十三ヶ寺住侶每年三月二十四日開山禪師例忌法會を執行し又明王殿に於ては十方信徒施主先主供養の爲めに法會を修行し尙ほ六月十七日黃金觀音法會を行ふ、雲衲恆ねに二十餘人在り、宮津に於ける第一の巨刹なり。

當寺世代

開山	心庵盛悅禪師	明暦三未年五月二十三日示寂	
二世	橘劦宗曇大和尚	萬治四(四月二十五日改元寛文元)年三月十六日	
三世	可山大悅和尚	寛永十七辰年六月朔日	
四世	密堂爐雪和尚	寛文十三(九月二十一日改元延寶元)九月十三日	
五世	萬水大樹和尚	延寶二寅年六月十二日	
六世	閩嶺嶽浦和尚	元祿九子年正月二十四日	
七世	廓堂湛然和尚	元祿十一寅年六月十一日	
八世	法雲壽節和尚	享保七寅年八月八日	
九世	圓山素明和尚	寛保二戌年正月十八日	
十世	瞎堂普觀和尚	同　年六月晦日	
十一世	斤山智峯和尚	安永八亥年二月十八日	
十二世	聖堂古先和尚	同　五申年五月朔日	
十三世	定山俊豊和尚	明和九(十一月十六日改元安永元)年正月二十三日	
十四世	台山道宗和尚	寛政六寅年十一月二十一日	
十五世	毛山國文和尚	文化八未年八月二十四日	
十六世	桃林慈仙和尚	同三寅年九月二十五日	
十七世	啓山忽柔和尚	同十酉年八月二十四日	
十八世	章山文海和尚	文政六未年八月二十一日	
十九世	俊國魯然和尚	同八申年十二月二日	
二十世	雲外玄喬和尚	同十一子年四月十二日	
二十一世	通嶽玄靈和尚	同十亥年六月二十九日	
二十二世	大伶拙明和尚	同十三(十二月二十四日改元天保元)年三月十四日	
二十三世	正戒慈禪和尚	嘉永六丑年十一月二十七日	
二十四世	無着賢及和尚	安政四巳年二月十四日	
二十五世	覺峰素宗和尚	明治十四巳年二月二十日	
二十六世	正修瑞門和尚	文久三亥年二月十六日	
二十七世	富山通國和尚	同　年九月十六日	
二十八世	徹宗義奬和尚	明治十丑年十一月十六日	
二十九世	至戒正淳和尚	同十二卯年十一月二十七日	
三十世	通玄常明和尚	同二十二丑年十一月二十二日	

三十一世　雄山全英和尚　同十七申年七月三日
三十二世　密山正宗和尚　同四十二酉年三月朔日
三十三世　大綱玄機和尚　轉住
三十四世　默道慧昭和尚　轉住
三十五世　聖山惠超和尚　現住

梵鐘銘曰

奉寄進
總持院殿松溪智源大禪定尼
寛永二十癸未歳四月五日　丹後守侍從源高廣
銘曰
松溪山頂開鑪鞴　釵釧瓶盤一味融
從是獅音徹靈界　古風再響又何窮
勅許左方惣宦御鑄物師　丹後國宮津住
水崎善右衛門　藤原篤恭

當寺什寶

一、黄金聖觀音　一寸八分（傳僧道照作）

宮津事跡記

安永元年辰四月二十五日大須賀幡之助墓の畑より掘出し領主本莊公へ差上げ公より當寺に下賜

宮津郷土誌

黄金觀世音像　僧道照の作にして日本三體の一
一寸八分の觀音なり、かつて宮津町字吉原大須賀可興の邸地に發顯する尊像にして本莊家に獻ぜしを本莊家より又智源寺に納め領分に令して六月十七日を大祭會とす。

宮津藩年中行事六月の條

一、來ル十七日御預ケ之正觀音開帳ニ付智源寺より幕御臺提灯相借願書出ル
右日限不相定候事
十九日
一、正觀音開帳相濟候ニ付智源寺ゟ御札並御供物差上候事

等の記事あり毎年六月十七日緣日として賽者多し。

一、本堂天井草花圖
龜山、文鳳、圓章、在中、蘆中、古秀、素絢、豊彦、土佐光字、友汀、應瑞、吳春、南岳、景洋、應文、景文、楠亭、文鳴、東洲、義董　以上應舉門下二十畫家筆
一、瀧見觀音像　一幅　唐吳道子
一、達摩大師　一幅　傳後水尾院御宸筆
一、羅漢愛虎　一幅　狩野探幽畫

一、達摩大師　一幅　雲谷等顔畫
一、觀音變相　一幅　宅摩法眼筆
一、達摩大師　一幅　豊彦筆

此他紙障、景文の梅、豊彦の牛馬、義董の人物二十枚續き等あり、又工作物の重なるものは。

一、智源禪尼墓標五輪塔　高拾尺

銘（慈持院殿松溪智源大禪尼）（慶長十七年壬子四月初五吉日　孝子敬白）

宮津郷土誌曰

高廣慈母總持院殿松溪智源大禪尼の慶長十七年四月逝去ありしより其の菩提を弔ふが爲寺院を建立す寺院背後の山麓に五輪の石塔あり五輪の高さ一丈餘周圍一丈八尺三面に梵字を刻み一面に法名年月日を刻む。

一、京極高春墓標　高七尺四寸

銘（清涼院殿前瑞尹月泉宗秋大居士）（慶安五壬辰年七月晦日）

宮津郷土誌曰

清涼院殿前瑞尹月泉宗秋大居士と刻する高さ七尺四寸周圍一丈六尺の寶塔あり、これ京極高治（一曰高春）の墳墓にして高廣の二男有故於當寺自殺す時に慶安五壬辰年七月晦日京極公自害の時蹴つる所の屏風當寺にあり猶血痕あり。

一、伊木常紀墓碑　高六尺四寸

銘（前太閤秀吉公御代黄袍物史伊木有齋常紀石塔）

宮津郷土誌

又名士として京極家の家臣伊木七郎右衛門常紀法名軍治院殿竿臣常旗居士の石碑あり高さ六尺四寸周圍一丈四寸其碑の左面に前太閤秀吉公御代黄袍物物夫伊木有齋常紀石塔と刻めり常紀は元眞田幸村の旗本にして大阪落城の時逃れて宮津に來り京極家に仕へ家老職を勤め俸祿千百石を賜り寛永二十二年齢八十六にて死せり。

一、石彫大地藏像

門前に安置す三段積臺石上八角蓮瓣抱兒地藏座像總高十尺子安地藏として歸依篤し。

銘

南無大悲地藏尊、釋迦文佛遺付屬、出現惡世入禪定、地獄無門代愛苦、餓鬼饑渴皆飽滿、畜生被毛卽解脫、修羅調伏我慢幢、人間濟度生死海、天上遠離五衰難、一稱一禮勝功德、今地後世大安樂、南無願王地藏尊、當山境內自古無主之石碑不少洒掃不至精魂冥依豈可不歎之乎於茲欲新立地藏尊且聚石而書寫妙經及法名以納塔中毎年修施食廣回向三界区区雜苔十方信施以爲永式也時哉募化四方則諸天應聲而喜捨淨財是以今成矣回記其槩略

銘曰

紅顔白髮化歸空　猶有眞加現塔中　後滅前亡莫疑著　筆頭回向一圓通
本是鷲留山上石　今茲造作地藏尊　一毫點出百千眼　普照幽都庶子孫

喝

安政四年丁巳六月　日　二十五世住僧謹識

一、石燈籠一對高六尺

銘（好是山堂無月夜　一天星出〇〇〇）（萬治二年六月日　京極信濃守高勝）

二、桃林山皆原寺

城東村字皆原にあり智源寺宗山俊典和尚の開山と云ひ聖觀音を本尊とす。

與謝郡誌　曰

桃林山皆原寺　城東村字皆原にあり本尊聖觀音、明和九年正月智源寺宗山俊典和尚開祖

三、東光山正印寺

正印寺は城東村字宮村にあり、大悲觀世音を本尊とす。

與謝郡誌　曰

東光山正印寺、城東村字宮村にあり本尊聖觀音寛永二年竺信和尚創建といふも如何なるや、當寺また藥師如來を祭り山號を東光山といふより見れば恐らく祇園社牛頭天王と密接の關係あらん。

四、瀧場山龍井庵

龍井庵、城東村字瀧馬小字コトハにあり、本尊聖觀音脇侍阿彌陀及び毘沙門天を祀る、寛政二戊年五月智源寺十四世台山道舟和尚隱棲せしを初めとす。同書　曰

瀧場山龍井庵、城東村字瀧馬にあり本尊聖觀音寛政二年五月智源寺台山道舟和尚隱棲それを開祖といふ。

五、大圓山盛林寺

上宮津村の喜多村にあり、もと宮津町の大久保にありて小倉家の菩提所なりしもの慶長八年四月上宮津の寺ヶ谷に移し貞享二年五月更に今の地に移等したりと傳ふ、本尊華嚴釋迦三尊趙室宗柏和尚を開山とす、小倉播磨守夫妻一色五郎義俊及明智光秀の位牌あり、光秀の位牌は其女細川忠興の妻か實父追福の爲めに安置すといふ。

丹後宮津記　曰

盛林寺　禪曹洞宗越前佐々布村偏洞院ノ末寺也上宮津ニ有城下ヲ二十町南

當寺地内ニ櫻之大木壹本有四方ニ枝振て庭上一面ニハヒコリ無類之名木なり花頃ハ宮津ヨリ群集して詩歌糸竹ノ巷トナレリ去ナカラ禪院ノ習トテ葷酒門内ニ入事ヲユルサネば多くは門外の芝野ニ毛氈しかせザ、エ取出シ賑々敷コト郡ニ異ナラス境内ニ明智光秀塔有並一色五郎滿信石塔此五郎ハ一色左京太夫詮範五代の孫也天正年中細川藤孝ノ爲に殺されたり此時藤孝宮津八幡山ニ居城セラル上宮津之城主ハ小倉播磨守ト云往昔是等ヲ宮津城ト云。

第四款　臨濟宗寺院

一、泰叟山國清寺

國清寺は宮津町字金屋谷にあり釋迦三尊を本尊とす、寛永二年京極高廣の室其實父備州岡山藩主池田輝政追福の爲めに文殊智恩寺別源禪師を請じて建つる所にして、輝政の法名國清院殿泰叟玄高大居士なるより採つて山號寺號となす、此の故に京極家は勿論爾來歷代の藩主厚く遇せり。

寺社免除高取調帳　曰

國清寺　皆原村

一、高貳石壹斗〇五合

一、新出五反六畝歩　須津村霞ヶ谷濱

是ハ京極丹後守様御代御寄附之由ニ而年々須津村新田之内ヶ國清寺相納候得共同村免定ニ加リ不申候ニ付戊戌年吟味之上免定ニ相加ヘ國清寺ゟ取納申付之ニ〇五番

御領分寺社集覽 曰

乘輿之五ヶ寺御禮席書上

金屋谷 國清寺

一、登城之節乘輿之格式ハ大頂寺智源寺智恩寺諸事同格ニ御座候

一、御在城之節御年頭登城御禮之儀ハ海棠之間ニ而横三疊目ゟ置御目見仕來本獻上寺格之儀ハ第五番目ニ御座候

一、御繼目御禮之節モ來本獻上年始之通御目見仕來リ候住持繼目之節モ御同前ニ被仰付候事

宮津日記年賀登城御目見の席のことを記せり曰く

二年(正德二年)八月四日國清寺、智恩寺、觀音寺、大頂寺、成相寺、成就院、本妙寺、經王寺、妙照寺、佛性寺、以上、

社家獨禮分宮島谷出雲、一ノ宮海部美濃、高野民部少輔、外宮内宮藤ノ間、惣禮ハ其次

町奉行　寺院惣禮ノ

郡奉行　社家惣禮ノ間ニテ

大目付　海棠ノ間ニ御座ナサル

町年寄六人

大庄屋十二人

糸屋惣左衛門

久寶寺屋九郎左衛門

湊屋長右衛門

宮津府志 曰

泰叟山國清寺　在宮津城下金屋谷

禪臨濟宗　京師妙心寺末

本尊釋迦如來　開山　別源禪師

寺記曰寛永二乙丑年京極高廣公室壽光院殿之建立也壽光院者池田輝政之女也造立而安置父輝政法名國清院殿泰叟玄高大居士位牌云々壽光院之墳墓者在ニ同所本妙寺。

寺院明細帳 曰

臨濟宗妙心寺派　國清寺

一、本尊　釋迦牟尼如來　兩脇文殊大士普賢大士

一、由緒　夫泰叟山國清寺ハ寛永三年故宮津城主京極高廣公ノ室壽光院殿父池田三左衛門尉輝政公ノ香花ノ地トシテ高廣ノ采地ニ於テ梵宇ヲ營造ス輝政公平生我カ臨濟ノ宗風ヲ慕フノ故ニ別源調和尚ヲ當國加佐郡倉谷村大泉寺ヨリ懇請シテ開山始祖トス今ノ國清寺之ナリ高廣公毎歲藏米五十石ヲ寄セテ供佛ノ料ニ充ツ高廣公ノ令嗣京極侍從高國公其後世ノ變遷アランコトヲ慮リテ須津村ノ内字霞ケ谷ノ海濱ニ於テ二町餘ノ砂洲下附セラレ市街ノ檀徒淨財ヲ喜捨シテ以テ新田ヲ開墾シテ永世ノ供佛料トス寛延三年桃園帝開山別源調和尚ヲ勅諡シテ心燈妙照禪師トス國清寺草創以來別源ノ法孫相繼テ住持ス

一、堂宇間數　東西七間南北十一間

一、境内坪數　千百拾坪　民有地第一種

一、境内佛堂　四宇

觀音堂　本尊聖觀世音菩薩

由緒　創立不詳延寶二甲寅年再建國清寺以前ノ靈場ニシテ惠心僧都ノ作ナリト云

六地藏堂　本尊六地藏尊

由緒　天保七丁未年當寺九世鐵谷建立
鎮守堂　本尊陀枳尼天　國清寺住職　石東誠論山
由緒　延寶五丁巳年當寺鬼門除ケニ勸請　右檀中惣代　豐田純介
龍護堂　本尊十六羅漢　同　糸井善兵衛
由緒　寶暦三乙亥年當寺八世松蔭建立　同　倉内市藏
一、檀徒人員　千三百八人
明治十五年二月

當寺世代左の如し。

開山　別源禪師　慶安四辛卯年六月十七日遷化
二世　南宗玄智和尚　慶安三庚寅年六月十九日
三世　泰安岫雲座元　萬治四辛丑年四月二十日（四月二十五日改元寛文元年）
中興　古堂伊曇和尚　寛文八甲申年九月廿二日
四世　性岩元實和尚　寶暦三癸酉年七月廿二日
五世　雪山等宥和尚　享保十八年二月二十日
六世　古溪等永和尚　寶永二年乙酉二月二十三日
七世　千拙師璉和尚　寶暦三癸酉年十月三十日
八世　松蔭昌壽和尚　天明八戊申年三月十四日
九世　鐵谷禪量和尚　享保二壬戌年三月廿三日
十世　仁方玄策和尚　文政二己卯年十二月十日
十一世　虛櫺巨侃和尚　天保二辛卯年十一月二十日
十二世　篤翁惠勒和尚　不詳
十三世　實原義篤和尚　明治五壬申年三月九日
十四世　諦宗祖演和尚　同十一戊寅年二月二日
十五世　寛嶺宗典和尚　大正十辛酉年三月三十一日
十六世　貫道和尚　現住

當寺什寶主なるもの

一、大黑天像　壹軀
木彫丈五寸（南海寄歸傳所載ノ形像）
一、文殊菩薩像　一幅　雪溪筆

一、白衣觀音像　一幅　牧溪筆

一、阿彌陀像　一幅　惠心僧都筆

その他二三點軸物あり、また當寺工作物の重なるもの。

一、石造燈籠塔壹基

銘（奉寄進九世月文殊石塔　右之施主者　攝州能勢住人　合者丹後田邊　かきや次郎右衛門尉夫婦爲二世安樂　慶長十二丁未歲六月十五日）

一、寶篋印荼羅尼塔壹基三段積臺付高八尺

銘　不詳

一、三界萬靈十方諸精塔　石造高九尺一基

銘（元祿十七年二月十五日　施主　木下氏　現住古溪誌）

一、青山幸侶室墓標　同

銘（芳心院殿皓雲惠慧大姉　享保十二年二月十四日）

一、石地藏尊坐像　三段積臺上八角蓮瓣付總高八尺

銘（兵藤家爲菩提　七代目兵藤良藏建之　明治三十七年三月　世話人　川島勘七）

追加

大正十三年五月十四日十五日橋立新聞第八百十號拾壹號

國清寺出世地藏

之れは板碑式の板地藏で、關東地方に鎌倉時代から足利時代に一時流行した板碑の代りに、少し降つて南北朝時代から戰國時代にかけて此地方一般に行はれたものが所謂板地藏で、型は板碑に似て居るが五輪塔の火、風、空の三輪が退化して屋根形ちとなり、地、水二輪が合併して後に來るべき位牌碑の前身を爲して居り、眞中に梵字が一字それに圓圍をつけ蓮瓣を加へ下に妙號を書き題目を記し佛像を彫み更に大蓮華座を置き左右に法號命日などを記入するやうになつたのが之れが成期の板地藏で、それから段々下り坂となり第一に梵字がなくなり次に上部の三輪が合併し次に佛像の蓮座が無なり命日法號がなくなり仕舞には一個の石片僅かに佛體の上半身を粗彫するやうになつて板地藏終焉を告げる、此の近邊には日置妙見山に應永廿二年即ち三十四年在銘の阿彌陀像が古い型の代表的のものであると我も人も見て居つた。處が此春鐵道工事の爲めに宮津町國清寺裏の墓地から永德二年在銘の板地藏が掘出された、幅下部で一尺三寸上部で一尺二寸厚さ三四寸高さ三尺七寸額に阿彌陀如來の種子「キリク」字を刻み中央に舟形を刳り地藏菩薩の坐像を半肉浮彫とし優艶なる蓮瓣の佛座を設けて其の下方に次の銘文が記入されてある。

逝去先妣婢用禪尼第三廻之辰此奉造立地藏菩薩尊像伏願五障早除預爲修證菩提乃至法界平等利益者也

永德第二五月六日孝子某敬白

藏像造立の趣意は明かであるが依て件の如し孝子某敬白では今少し痒い所へ手が廻りかねる、婢用禪尼のそも何人であつたか今遽かに知れやうが無い、永德以來世に忘れられて無緣となつた板地藏が泉下に沈んで浮まれないのか鐵道工夫をオーイ〳〵と地獄から呼びかけてトンネル口から抱へ出され、國清寺境内に結構な墓石を積立てゝ其上に据へられお住持の施餓鬼法會のお經を讀んで貰つて、名も出世地藏尊と附けて崇められ墓石の正面に次の文が錄されてある。

大正十三年二月九日鐵道工事際地藏尊發掘因世話人志賀德兵衛謀有志爲無緣佛千茲奉安置乎　現住十九世貫道誌

と、嗚呼文明の餘澤五百四十三年前の無緣佛に及び大正の聖代鐵道の開通によつて世に出で浮まれた、出世を欲するの輩が祈る誓願は夫れ〴〵聽いて叶へてやり給ふといふ有難い御誓願である、惜しい事には舞臺掛けに作られた臺石が江戸時代初期の石碑で界隈にも類ひ稀れなるもので、前なるは蘭心妙芳禪尼靈位慶安五壬辰三月十二日とあり後なるは地藏像が据へてセメントで固めてあるので注名命日は讀めぬが石碑の形式から見れば前者より古くとも新しい事はあるまいと思はれる。抑も地藏樣が御出世なされたからとて三段積の臺石の上に而かも舞臺掛けに仰向けになつて興行足藝の力持ち宜しくで腹の上に地藏樣を立てゝ無終の終りまで辛棒せなければならない破目に陷つた世にも哀れな無緣佛が二人出來た譯で、尚ほ熟ら見れば三段積みの臺石も皆古石塔ばかりである。一人の地藏樣が出世するのに數多の善男善女な踏み臺にして辛棒も名譽も蹂躙して御自分は悟りとして御座り、如何にも強者暴虐弱者必滅の世の中とはいへ用禪尼一人の爲めに仰けられ俯せられ横に倒され半分に截られ東西南北天地を向いて犧牲となつて苦情も言はずに我慢して御座る所に優勝劣敗の世情が忌憚なく現はれて居る、云々。

當寺梵鐘、寺記及び鐘銘次の如し

右梵初鑄者矢野宗因居士寄附中興（三世）古堂老祖ノ代也再鑄十世仁方代、嘉永七年十二世萬翁代領主大砲鑄立ノ砌梵鐘差出シノ命アリ寺檀協議ノ上地銅九十貫目ヲ以テ之ニ換ヘ遣ス今ノ梵鐘是也。

泰叟山國清禪寺鐘銘並序

丹後州與謝郡宮津庄泰叟山國清禪寺者乃池田三左衛門輝政公香火之地而駐住妙心別源和尚草創之靈區也輝政公位上三品官登參議播備作三箇國之主而　東照宮之婿也蔑後鎌倉清寺殿泰叟玄高大居士安智院殿京極高廣公先是領本州國清寺殿以某女妻之號壽光院寛永三年壽光院於安智院殿之采地營一梵宇奉爲先孝追薦冥福今之國清寺是也國清寺殿平生甚我臨濟之宗風故懇請別源調和尚爲開山始祖國主安智院殿令嗣湖龍寺殿京極侍從高國公慮其後世有遷變附會田貳町爲遺永久今之須津村海濱之田是也古堂老師住住山有改造之功故稱古堂爲中興祖國清草創已來別源之法孫相繼住持不令別派之徒領之蓋遵開山遺命也余天橋住山之日命天隱子主之有檀越矢野太左衛門法諱宗因者寺有梵鐘以其小爲恨揮毫捨金命工鑄之形模音聲共稱意焉宗因妻千因亦助某志鑄鐘之事蹟布在方策不可縷陳矣以此功德追薦先考法林淨觀先妣清室妙珪繼母實法妙唯之冥福其志可尚矣寺主天隱謂余曰新鐘既成請爲之銘因俚語爲銘並記顚末爲敍云

銘曰

宮城坤隅　山號泰峯　營一梵宇　傳佛心宗　緊命鬼氏　鑄就洪鐘　晨昏擊動
肅整梟龍　幽破獄苦　明豁人胸　所有寃外　無不潛蹤　施者受者　福壽疊重
其功不朽　在我筆峰　別源一派　萬古溶々

元祿第二己巳年矢野氏所寄之洪鐘撞擊夫節音響不雅奕代患之久矣故今茲繼松隆師祖鑛谷師父之夙志以鎔古銅鐘改鑄造一口矣上來銘敍橋山雪山寄和尚所作而述當山開址因由並舊施主宗因殊勳審壺之且記識尙古故重彫鐫之以垂悠久云爾

寛政改元龍集己酉歲四月吉辰

現住當山策　仁方謹記

冶工當國宮津住　木崎善五郎

同姓　與三衞門

嘉永七甲寅年造此洪鐘矣與慶鐘內記

二、默止庵（廢寺）

默止庵、宮津町字川向の山手にあり、延寶年間字川の人默止と云ふものゝ創建といひ善光寺三尊佛を本尊とす、境內老櫻一樹ありて花期騷客多し。

丹哥府志曰

默止庵　秋葉の次　臨濟宗

延寶年中僧默止といふもの宮津に來り地を與謝の海の見ゆる處に卜し庵を結ふ、今の默止庵是なり、元竹野郡字川の人なり草書を善く

す頗名あり、庫の前に三抱もある一老櫻樹あり、是默止の手から栽ゆる所なり、盛開の日尤も美觀とするに足る。

默止開刹の後は長興三世龍門和尚、龍澤和尚、梅林智芳禪尼、大羞自賢比丘尼など住せしも今廢寺となり城東村字惣圓通山觀音寺の管理に歸せり。

半鐘銘

梵鐘一口　煉鍛功成　朝々暮々　撞破無明

大日本丹後國宮津川向町

默止庵現住智芳代

嘉永二己酉歲二月吉祥日

鰐口銘

文化十二乙亥年

奉寄進　御仲間中

廢寺と雖も櫻花の一名所たるは尙ほ失はず。

三、圓通山觀音寺

觀音寺は城東村字惣にあり、宮津藩主永井尙征寛文九己酉年城州淀城より國替の節勅賜紫衣傳心禪師を懇請同道して當地來在の廢庵を興し永井家の香華所となせしに濫觴す依て禪師を開祖とす、本尊聖觀世音を安置永井家の位牌を祭る、此の故に同氏以來累代乘輿御免五ヶ寺の一なり。（寫眞參照）

御領分寺社集覽曰

乘輿五ヶ寺御禮席書上之寫

惣村　觀音寺

一、寺格之儀ハ智恩寺次國清寺上ニ而相勤來候

一、御禮登城之節ハ海棠之間ニ而壹東壹本獻上仕御目見仕候

一、住持交代仕候得者繼目御禮申上尤も殿樣先々被遊御逢候

一、乘輿之儀者切手御門ニ而下乘仕候尤も御墨附頂戴罷在候

丹哥府志曰

圓通山觀音寺　臨濟宗

圓通山觀音寺は寛文年中永井侯の建立なり延寶元年十一月十一日永井尙征江戸に在て卒す年六十一歲法名を龍谷院殿といふ其位牌を祀る又寺の後に永井侯一族の墳あり。

觀音寺鐘銘

大日本國丹後州與謝郡宮津惣村

觀音禪寺寛文年間永井信州大守

尙征侯領宮城日敦請再住妙心傳心和尙中興斯地納先祖神儀而以爲菩提坊永免地于其後尙長有故長逝武江寺亦隨到寂寥年尙矣後住若干無力興廢焉知衰替還爲復興之端審也而後無文禪師到住此火撞刀畊屢歷年五緣漸熟從正德丙午到享保壬寅年佛殿方丈悉昇新曾欲改造庫院而不果予繼其志寶曆二壬申年結構之而告完然唯闕梵鐘矣今歲戊寅年化主當國井室邑眞相禪寺徒淨心道者鞭不退顯輪遍化十方郡縣聚落所向信男信女喜捨貲財於是命冶工鑄巨鏞乃熾炉扇炭鎔液金銅意成法器及備長晉凡衆圍所有者無不具足嗚呼佛事作善皆隨他恩力爲大矣哉晉佛之法也眞

而苞羅無形妙而旁魄萬有則見聞覺皆靡不具明精眞三所寓焉若夫瞥龍耳聽覺范蠡發於有聞而歸無聞卽動靜而證入於圓通三昧之門則未有盛乎鐘者矣資今營銘之銘曰

迴波棄倫　竟鐘洪鐘　發揮沈潛　啓迪頑愚　嚴脅警且　通幽徹明
菩提路豁　煩惱醒　山門鎭靜　水傳無窮　撞破寬界　同證圓通

現住提宗綱謹誌焉

寶曆八寅三月吉祥日

治工河內國長家末孫宮津住
木崎與三右衛門　藤原久次

化主當國井室村　淨心
天心院桂岩自香居士

一番鐘宮津住
一文字屋伊左衛門

二番鐘　當村彦左衛門
三番　當村中右衛門
四番　皆原村治郎右衛門
五番　有田村加左衛門

右　治工

また同寺半鐘銘

梵鐘一口　煉熔功成　朝々暮々　撞破無明

六、大日本國丹後州與謝郡宮津城東圓通山觀音禪寺

延享四丁卯暮夏穀旦

住持小比丘提宗謹識

治工　木崎與三右衛門

また境内觀音堂あり、本尊聖觀音を祭り貞享二乙丑年七月國守阿部對馬守の家臣渡邊惣兵衛の寄附なりといふ、外に鎭守堂安永年中の創建にて辨財天を祀る、此の他工作物に

一、石塔一基高七尺

銘（毘盧遮那浮圖　享保十三龍次著雍涒灘十月穀旦　石工　三四郎彫　道人　自正建之）

四、妙德山戒岩寺

戒岩寺は城東村字波路小字附地にあり、本尊文殊菩薩を祭る、寺傳によれば神代開闢の古跡本尊文殊菩薩の尊像は梵天帝釋化人となり作り給ふ所の瑞像にして九世戸文殊の古道場なるも寛文頃まで住僧不詳寛文五年覺翁宗悟和尙住寺中興すと。

同寺梵鐘銘

波路戒岩寺鐘銘

丹後州與謝郡宮津庄波路邑妙德山戒岩禪寺者妙德尊古道場而、世稱天橋山智恩寺之奥院者也、原夫年代久遠而不可其草創也、愛有關翁

等塞首座者住干此山久化緣已熟大發中興之志大小之檀那亦戮力助焉、本堂庫院共一新矣千並鯛洪鐘更欲願鑄成之年老不果舜甫逝矣、其徒三道要禪師接其師之武謀之有化主道儀居士者、同其志化益十方村落而爲銅鐵之資事漸成矣冶工先墜、要禪師令予爲銘予辭不敏不可因聊述蹇讃之云云其銘曰

戒岩高聳　妙德化城　宜泰梵樂　洪鐘常鳴　乃開爐鞴　鎔金鑄成　蒲牢巨吼
殷々其聲　東迎素月　西送長庚　開姓不昧　昏夢忽驚　深徹水界　能滅火坑
普天率土　永觀昇平

現天橋山比丘大祐師磐　謹識
享和二壬戌暮春念三烏

化主　浦谷藤右衛門
肝煎　安田平左衛門

現住比丘三道智要再鑄之

五、東湧山寶泉寺

寶泉寺は城東村字宮ノ下にあり、本尊釋迦如來、創立年代詳かならず慶長年中舜公和尚中興すといふ、境内地藏堂あり天保六未年八月小谷仙庵外四名信徒の建立なりと、境内紅梅あり中春花を賞するもの多し、工作物三界萬靈塔一基あり、二尺角高八尺三段積臺上に立てり。

銘（三界萬靈塔）
（天保六乙未年八月　伊豫州宇和島前大隆禪師建焉

六、獅子軒

國清寺隱宅といふ城東村字獅子崎小字庵にありて享保十二丁巳年國清寺七世千拙師蓮和尚隱棲の地なり、境内地藏菩薩及び觀世音菩薩の石像あり何れも天保九戊戌年國清寺十二世篤翁惠勤和尚の建立なり。

七、龍松山智德寺

上宮津村の今福にあり、本尊釋迦如來慶長五年智恩寺如水和尚開基創建すといへり。

八、天橋山智恩寺

智恩寺、一般に久世渡文殊といふ、吉津村字文殊にあり、堂塔全備の巨刹にて上皇室を始め公卿公家將軍家又は國守領主の信仰ありて宮津藩にても乘輿御免五ヶ寺の一なり、本尊文殊菩薩は寺傳に梵天帝釋化現の作と云ひ平安朝初期遲くも藤原時代を降らず優秀の作にて今國寶なり。（寫眞參照）寺領も寺社免除高取調帳に

智恩寺	惣村
一高五拾石	
此譯	須津村
三拾七石七斗五合	
三町九反八畝歩	
拾三石三斗六升八合	
壹町壹反二畝拾貳歩	

是は京極丹後守樣より智恩寺に須津村ニ於て御寄附高五拾石之内相渡し候處先年右宮津御支配所高外ニ成有之元祿十二己卯年奥平大膳太夫

樣御領知之節文殊境内ニ而御改出被成候得共免定之内ゟ書加ヘ智恩寺ゟ取納申付之
但兩村高合五拾壹石七升三合ニ相成差引壹石七升三合過ニ相成候得共前々如斯御座候。

また御領分寺社集覽には

乘輿之五ヶ寺御禮席書上

九世戸　智恩寺

一、當寺末格之儀ハ第三番目ニ御座候御年禮等登城之節ハ切手門之内迄乘輿仕候、海栄之間ニテ横三疊ヲ置御目見仕壹束壹本獻上仕候事

一、御着城之節ハ蜜柑獻上仕候尤モ使僧兩人御城鶴之御間迄持參及披露候事

一、殿樣文殊御參詣並ニ御代參之節ハ敬客之僧壹人山門迄御出迎ニ罷出内陣ゟ御案内申上直ニ方丈御成ノ間ゟ御通シ申上住僧御挨拶申上其上ニ而御餅菓子御茶差上御歸之節ハ住持玄關迄罷出敬客之僧山門外迄御見送申上候但シ是ハ江戸御順檢御參詣之節格式ニ諸事仕候事

一、御代參之節ハ敬客之僧壹人山門迄御出迎ニ罷出内陣ゟ御案内申上方丈座敷ゟ御通シ住持御挨拶申上其上ニテ茶菓子持出御歸之節ハ住持玄關迄御送り申候其外諸事見合仕候事

當寺のことは宮津府志の記事尤も詳細を極むれば次に全文を採錄すべし。

天橋山智恩寺　在與謝郡九世渡今曰切渡

禪臨濟宗京師妙心寺末

本尊文殊菩薩　帝釋化人作

脇士　千圓王　均提童子　毘首竭磨作

中興開山別源禪師

寺記曰當寺者神代開闢之地也延喜帝勅賜寺號山號云々、拾芥抄云智恩寺丹後九世戸文殊天龍六齋供燈明云々、天橋立圖記曰延喜四年甲子勅して山號寺號を賜ふ其後四百餘年を經て嘉暦年中嵩山禪師住侶となる是禪刹の始なり其れより寛永迄三百餘年住侶詳ならず寛永年中國主高廣公別源禪師を請し住持せしむ是より洛の妙心寺に屬す文殊堂明暦年中改造、禁裏より修理料を賜ふ傳奏の文書當寺に納むと云々。

謹按一說に云今文殊堂の地は往古與佐の宮の舊蹤なり文殊堂元波路村にあり中古以來今の地に移ると云ふ又宮津古記の說に別源禪師より五代雪山和尚の代に與佐の宮舊跡に殘りたる社を橋立の洲崎に移し橋立明神と神號を改めしなり以上の二說是非を知らずと雖も延喜帝以來の事跡舊記に顯然たれば古代の開基に疑なし然れども其神代の開闢と云ひ或は天照太神と地神二代天忍穗耳尊二神なして海岸寺より此處に移すなと云ふは誣說なり。

本堂　巽向　額　内　智恩寺　延喜帝勅筆　外　五臺山　隱元禪師筆

山門　額　海上禪叢

鐘樓門　額　曉雲閣

方丈　額　同居屈

經藏　額　標月指

地藏堂　額　無相堂

觀音堂　額

多寶塔　明應年中當國府中城主延永修理遺爲寄願造立

衆寮　庫藏　浴室

石地藏二　在門左右

四方　當國三重城主大江越中守應永三十四年所造一千體之内零身之像也像背有銘誌

東方　永享四年日州大守沙彌祐長者所造

鐵盤　御洗手盤也

天橋記曰此盤古當國興法寺と云ふ伽藍にありし湯船なり内に銘あり正應三年云々又一說曰此の如き鐵盤成相寺橋木絲城寺にもあり

三盤共竹野郡等樂寺にありし湯船なりと。

和泉式部石塔　稻富一夢石塔

以上共在當寺境内

齋藤德元石塔　載古跡之部

塔頭

久昌院、本光院、壽昌院、對潮庵、心月庵

末寺　二十五ヶ寺

寺領　五十石

當寺什寶

香爐　俗曰章魚香爐

今所置於佛前者元祿年中天野氏之寄進也人見文元銘之其序曰寺有香爐其形模章魚俗傳昔出龍宮云旦夕焚香經年既久有毀損處故南都主宰元功忠巖居士大關勘右衞門增公之寡婦春光院天野氏聞之命之工新鑄香爐徑其圍不異古製云々天野氏者長重之女也請余作銘云々

元祿五年壬申九月竹洞野宜卿識

鰐口　俗曰鱣鰐

銘云至治二年壬戌十月十六日海州首陽山藥師寺云々。

按至治は元英宗年號二年壬戌當本朝後醍醐天皇元享二年至今茲寶曆辛巳年凡四百四十年餘也。

以上二品俗傳云古漁夫海底より魚叉(ヤス)にて突上げしと云ふ今に其痕あり。

佛舍利、白馬角、螺貝珠、木に生たる鎌

右四品は松丸殿より京極高廣公に傳へられ高廣公之を當寺に寄附せらる寛永十四年二月京極家臣中川某より遣す目錄あり。

龍の卵、龍鱗、天狗の爪、牛黃

紫石硯　寛文年中若州小濱城主酒井忠直公寄附

赤紫色

長八寸五分
幅九寸五分
厚一寸九分
裏有林學士之銘

末央宮瓦硯　宮津商家某寄附

黑紫色

長一尺二寸
幅九寸七分
厚一寸三分
重二貫目餘

文書

桃園院綸旨　寛延二年八月七日別源和尚禪師號勅許之綸旨也

勅賜貴金綸旨二通　明曆二年九月廿五日　寶曆十三年七月八日

長岡藤孝公忠興公連名文書　天正八年九月廿五日

開物判水帙　天正九年　吹家臣米田豐物記

第四編　第十貳章　宮津の寺院

細川忠興公文書　天正十四年十二月廿四日
同家臣米田宗堅文書　文祿三年六月二十四日
羽柴生駒公文書　慶長五年十二月廿五日
此外文書數多
細川忠興公制札　天正十一年十一月七日
京極高知公制札　慶長五年十二月廿五日
此外制札數多
緣起一卷　徹書記筆
當寺幹緣疏一卷　文明十八年　相國寺興彦龍筆
弘法大師眞跡心經一卷
同印刻大黑像
寺記曰此版表は裝裝の圖田相分明也唐の玄宗開元丙子とあり或時弘法大師當寺へ參詣の次右の圖一覽の後裏に大黑の立像を手つから彫刻すとなり此大黑毎年正月十一日印して世に施す裝裝の圖は今磨滅す五十年前之を改め紙面に印す。
武田信玄筆紺紙金泥經一卷
敬法門院御遺物歌仙色紙三十六枚
冠　裝束　緋袴　烏丸殿寄附
足利義持公寄附辨財天像
龍蛇弓　一張は志賀隨翁寄進
此外古作佛像佛具等多
古畫

彌陀如來　惠心僧都筆
地藏　趙子昂筆
三尊佛　同
觀音　牧溪筆
同　李龍眠筆
虎　李唐筆
葵　舜舉筆
春日曼荼羅　宅摩筆
出山佛　雪舟筆
山水　雪村筆
十六善神　小栗宗丹筆
涅槃像　兆殿司筆
維摩　啓書記筆
牧牛　古法眼筆
達磨　等益筆
同　寒殿司筆
此外古畫多
古筆
一休和尚筆　二幅
隱元禪師筆　三幅

法燈國師筆　一幅

澤庵和尚筆　一幅

此外古筆多

短冊

慶長四年六月二十三日烏丸光廣卿中院通勝卿細川幽齋公等當座和歌短冊也

以上什物

鈍血柱

文殊堂の内四柱の内西方の柱を云ふ天橋記に曰昔乾峯和尚鈍根を悲み大士に祈る大士夢に寶劍を呑ましむ覺て血を吐き柱を染む其柱を今に鈍血柱と云ふ。

當寺古文書

曰

九世戸智恩寺幹緣疏

丹州路天橋山智恩禪師乃文殊大聖降應之地而日本五臺山也有古記按其略云我國經天神七代而到地神勅地靈產人傑丹州天橋立本邦名勝也爰妙心開山國師十六世洪喬別源和尚誕彌小島承嗣大泉興五臺山挽回薩埵悲願居千年浦觀贊寶祚長齡新瓶精舍扁榜國清向營廢址傳布正法荷宗德威凜烈抑揚應機警衆規度精嚴禪誦不怠檀信添恆產來參慕嘉獻酬恩殊常臨終修阿師薦施澤無際歷年得厥孫昌化蹟雖邃升聞在近仍誌心燈妙照禪師

寛延二年八月七日

皇基鞏固　帝道遐昌　佛日增輝　法輪常轉

本朝特稱五臺山者丹後州天橋山也州屬山陰道而地勢向北蓋北印度有文殊堂支那五臺山亦屹立州北文殊所出現又笠桑共在于北方憑茲論之則其爲稱呼良有以哉吾山謂地之開闢則曷繫于神代謂寺之草創則　延喜之朝勅賜山號寺號其爲禪刹也嘉曆年間嵩山住此爾以來到寛永二百余禩記主名者十之二三謂其宗派則濫觴於調別源流傳於今六代也謂其建立則國司保昌嘗修本寺治承年中小松重盛亦添修焉文明壽桃募化興頽別源以來住茲山者有廢而無不修理焉明曆年間智南宗奏朝延化欅樾一新大殿國主高國善之勤力現今所在也唯其中央之四柱不革故者俗傳爲神所造也厥木堅緻如漆如石固千載邃古之制造最可信者也四柱之間高構版牀三尺許升階牀上設須彌座戸外垂幔而内安置薩埵像莊嚴殊絶然余意其末全備而希願造寶龕思而不果回循彌年享保戊戌春使化主某等懷疏入洛而裏之公聽則市令山口安房守諏訪肥後守爲之首肯乃走街衢而日和貴賤門行化數月而得若干余尚慮其費用不足而募之鄉里士庶及遐邇遣俗來詣大士者則傾心喜捨如水止坎回命大匠富田河内制作之龕又命富田某等數人而新作須彌座且補神造柱朽腐之處如其新成龕及須彌座命漆工某等布之漆之塗以黄金龕大不盈十尺而制度規畫準之宮殿結構玉椽架虛寶鐸鳴風鬼神負棟師子集楹蟠龍宛轉而承楣靈禽飛舞而當門雲騰浪湧而如神龍欵出海底而捧在於虛空觀者靡不歡喜尊重矣己亥夏資始庶子冬落成若是非薩埵功德周遍沙界焉得如此乎庶幾龍天擁衛檀信歸崇萬世永不朽而同壽於天地矣故記工作精巧及化主勤勞以貽後來生信心者云爾于岩亨保六星纏辛丑孟陬念五日

住持比丘禪宗謹記　印　印

本州宮津城主青山大膳亮幸侶

家老

小出彌左衛門

朝日奈藤兵衛

堀尾丹下
鈴木兵左衛門
貴田玄蕃

天橋山塔頭

本光院
久昌院

末山

海隣寺物先座元
興勝寺嘉龍
松源寺義鐵

化主　萬松寺紹隆
雪林寺嘉鶴
海福寺祖溪
江西寺嘉承
玉田寺覃晛

赴洛　願夢寺祖疆
高原寺崇谷

化主　姜福寺性俊

赴洛　戒岩寺祖活
慈光寺祖信
寶泉寺義直

赴洛　禪海寺了義

赴洛　慈眼寺祖廣
天長寺祖猿
智德寺智本

萬松末　福壽院祖什

當寺正應在銘の鐵盤あり固と竹野郡小原山與法寺のものなりといふ。

藤原成粲天橋遊草　曰

舟子曰先詣二文殊一爲レ便、卽上レ陸前導門前地形如二獨鈷一有二茶肆一左右皆步、側有二石燈一導者曰每歲正六月念四點レ燈稱二之龍燈一門上設二麗譙一扁曰二黃金閣一其下扁曰二海上禪叢一門內置二鐵盥盤一高二尺許徑三倍之一古色可レ玩。入二文殊閣扁曰二五臺山一僧隱元所レ筆、其內室扁曰二智恩寺一　醍醐帝所レ賜、就二其左室一觀二種々寶器一曰海鶴鱗口邦俗建二神祠一懸レ稱二鱗口一者擊レ此祭レ之、以二其形似一鱗魚張一口世通稱レ之此亦以二其似一海鶴一而得レ名。曰章魚香爐亦以二其形似一章魚一而名レ之、相傳此兩器漁人獲二之海中一。曰牡牛玉牝牛玉白馬角天狗爪龍卵龍鱗梵貝玉千里光玉榎樹所レ產之鎌。從奴詰曰牛無レ角馬有レ角奇甚既是角何以知二馬白一且榎樹產レ鎌奇尤甚。余曰角二於牛一誰奇レ之以二其角一於馬一而奇レ之、既是馬則白黑皆馬奚論二其色一。鍛工造レ鎌非レ奇以二其產一於樹一而奇レ之、既奇レ之則寶レ之奚怪。（中略）歷二觀其境一曰經藏曰祠堂曰辨天、皆麗掃潔塵外之觀也。

京都府史蹟勝地調査會報告第五冊　曰

文殊智恩寺境內石佛其他

閼伽水鉢ハ本堂ノ前ニアリ鐵製ニシテ口徑五尺六寸二分高サ二尺一寸アリ口緣厚ク內側ニ突起シ、外側ノ中央ニハ一帶ヲ繞ラシ底部ノ中央ニ水拔キノ大孔アリ側ニマタ水ノ湧キ出ル小口ヲ伴フ、銘文ハ內側ニ存シ鑄出ニシテ次ノ如ク讀マル。

奥法寺

湯船鑄事

右以大願主拜

十方檀那之合

力所鑄船如件

正應三庚寅七月七日

大願主　物部□□

大工　山川□□

毎月八日阿彌心經

大願主□□□□

文ニ依ルニモト興法寺ノモノナリシコトヲ知リ得、但シ該寺ノ所在未ダ考ヘ得ズ、大願主及ビ大工ノ名ノアル處面粗トナリテ判讀スベカラザルモ香取秀眞氏ハ當代ニ於ケル山川ヲ稱スル鑄物師ノ研究ヨリシテ大工山川ノ下ノ二字ヲ以テ正應五年河內葛木慈光寺鐘、元應二年周防遠石宮鐘ニ見ユル眞清ナル可シトセリ、成相寺ニ同式ノ而モ眞清ノ銘アル水盤ノ存スルニ對比シテ信ズ可キナリ、正應三年ハ西紀一二九〇年ニシテ伏見天皇ノ御世ニ當ル、マサニ古式湯船ノ現存スル最モ古キ一ニ數ヘラルベキモノナリ。

尙ほ當寺境內石地藏及び阿彌陀の立像あり、孰中應永在銘にて有名なるは大江越中守等身像にて高六尺一寸のものと永享在銘の五尺六寸の立像となり。

益軒天橋記　曰

總門の兩方に石地藏あり四の方當國三重大江越中守といふ者造る所一千體の內等身の像也東の方は日州大守沙彌祐長といふ者造る永享四年なり。

丹哥府志　曰

石地藏　二　在門左右

西方　當國三重城主大江越中守應永三十四年所造一千體之內等身之像也背有銘誌

東方　永享四年日州大守沙彌祐長者所造

丹後舊事記、丹後一覺集、丹後細見錄等の諸書皆殆んど同文を揭ぐ、最近京都府史蹟勝地調査會報告第五冊に、

（前略）石佛ハ本堂ノ向ツテ右側ニ三軀アリ、（中略）三軀ハ何レモ地藏ニシテ中央ヲ除ク他ノ二ノ背面ニ同ジク造像銘ヲ刻セリ、東ノ一軀ハ總高六尺一寸ニシテ銘ハ

願主三重郷大江越中守法名永松

奉彫刻一千體內特取石等身同以

結永旨勝因者也

應永卅四年九月十七日

トアリ文中ニ見ユル三重郷ハ蓋シ中郡三重ノ地ナル可ク、當時同地ニ據レル大江氏ノ寄進ト見ル可キナリ、文字存スル處長サ三尺一寸六分幅八寸アリ。他ノ一ハ總高五尺六寸

願主　□州太守沙彌祐長

永享四年壬子四月廿七日

ト刻銘二行ナリ、願主ノトノ一字明ナラズ香取氏ハ日ト釋シ天沼工學博士ハ因ト讀メリ、後者ナルベキカ但シ今疑ヲ存ス。

と云へり、現在の位置は前掲天橋記、宮津府志所載の場所とは異り祐長建立と云へる永享の地像も共に門内の東方に移し更に橋立内にありし地藏像一軀も此に移せり文化年中の九世戸智恩寺指出帳　曰

一、石　地　藏　四體

内二體は橋立の内に御座候

内一體は應永三十四年當國三重城主大江越中守殿御寄附

内一體は永享壬子年因州大守沙彌祐長建立

とあり橋立の内の二體は小天橋の浪開地藏と上記兩地藏の中間にあるものにて「施主新治村　清心」の銘を刻せり。また同寺境内の墓地内に嘉吉在銘の阿彌陀像あり東京帝國大學考古學會出版の考古圖集第三十五集に寫眞を收め説明して曰

與謝郡九世戸智恩寺の石佛

天橋の傍九世戸智恩寺の墓地内にあるもの阿彌陀の像にして高さ石臺を加へて五尺六寸三分あり、形整ひその衣紋の間に

音一房

□阿彌陀佛

七世父母定□□門□□禪門

嘉吉元年六月二十□日

の刻銘ありて、嘉吉の造立なるを示せり、同寺境内にある應永、永享の石佛は從來人の注意に上れるも獨り此の像のみ漏れたりしを以つて今ま本圖集の最後に收めたり。

と載せたり、尚ほ同寺境内立座二體の銅佛あり立像は觀音像にて山門西北方海岸に安置せり明治三十九年改版大日本橋立みやげ　曰

◎觀世音の像

丹後竹野郡間人村の出身者にして一時大阪はいふに及ばず關西地方に於て豪商の聞ゆ高かりし松本重太郎となん呼ぶ人の先祖菩提を弔ふ爲めに建立せしものとは像の背面に記されたり、盛者必滅今は其人の呼び聲も聞かずなりぬ云々。

六角形三段積み高四尺の舞臺掛の臺上に立てる銅像にして高き蓮華座共約十尺あり背銘曰

謹按觀音薩埵本誓之聖文我誓願大悲之中一人不成二世願我墮虚妄顚過中不還本覺捨大悲云々余悅薩埵行願有歳千此矣鑄造寫像三軀奉奉安干橋立嚴島松島之三勝地以祈考妣之冥福施及衆生也興傳榮華兮百世寧遺寸善兮千春云爾

爲感應院元質義亨居士

妙奇院利室松貞大姉菩提

明治三十五年一月　願主　松本重太郎

臺石に「肝煎荒木金兵衛」と刻す、陸前松島、安藝嚴島大願寺また此の像を安ず卽ち日本三景三體觀音の一なり、また座佛の銅像は地藏菩薩にて闍迦水鉢の傍小堂を構へて安置す、日本六體の地藏像なること刻銘に依つて之を知る。

地藏大士銅像之銘並引

生死中□識浪罪根深結累々如山惟下大大悲願王之力纔爲拔之茲道智居士我彼願海而喜捨資財手持寶珠鑄千地藏大士之銅像六軀安千某州五ヶ道場一軀留干我庵室自利々他欲脫六趣之業繫得二世之福利惟其願也

銘曰

枯樹寶珠　大悲願王　一喻一禮　受福無量

況作銅像　安六道場　利益應現　冀運十方

元祿七甲戌年七月廿四日

但州養父市場大橋氏道智　敬白

萬里　鐵誌

此の地藏安產の誓ありとて信者少からず。

同所に稻富一夢の塔あり、寶篋印塔にして戰國時代弓木城に居りし鐵砲の名人稻富伊賀守の供養塔にして京極高知の建つる處なりと。

與謝郡誌　曰

文殊智恩寺境內和泉式部の歌塚といふも郡內にては古き型にて同境內京極高知の追建したる稻富一夢の墓標あり九輪の頂まで凡九尺同境內江戸末期のもの一基あり云々。

京都府史蹟勝地調査會報告第五冊に曰

塔碑ノ類トシテハ閼迦水鉢ノ傍ニアル總長九尺ヲ超ユル寶篋印塔一基ト文祿二年ノ大供養塔トヲ數フヘク前者ハ其基礎ニ

前伊州大守泰譽榮門稻富一夢

右施主者　羽柴丹後守高知

慶長十六辛亥二月六日

ノ銘ヲ有セルモノナリ

智恩寺境內更に寶篋印塔一基あり、山門の內本堂に向つて右手に高十三尺施主具性妙本禪尼とあるも建造年月今讀む能はず恐らく天保前後のものならん、和泉式部の歌塚なりしといへる大寶篋印塔も足利中期は降らざるべきも刻銘の有無いま判明せざれば其の素性を知る能はざるを遺憾とす。

國寶建造物なる多寶塔の傍らに奧平修理定皓の墓碑あり基方六尺二段積の臺上高十二尺餘の大五輪塔なり

與謝郡誌　曰

文殊境內奧平公墓標高十二尺餘、新しき型にて上に脫體現成、下に智涼院松嶽道喜居士寶永四丁亥六月念三日俗名奧平修理定佐とあり同境內外に大五輪二基を存す。

とあり、尙ほ板碑の二三基また見るべく、蓋し關東地方には板碑多きも關西には甚だ少く宮津地方には殆んど絕無といふも不可なく僅かに當寺境內にある佐濃備前守墓碑稍や板碑の形ちを備ふ、文明在銘明應在銘の二基ありて熊野郡佐野村の城主佐野備前守夫妻の供養塔なり。

京都府熊野郡誌に曰

佐野備前守の墓碑は與謝郡文殊智恩寺の墓地內に在りて、前備州廣林源譽禪定門文明十六甲辰年四月廿三日逝とあり一は預修春屋寞桑禪尼明應二甲寅年二月時正日とあり碑は共に板碑にして妻春室が明應二年二月に夫備前守の菩提を弔ひ己れの碑をも建設歿後の冥福を預修せる處なり、丹哥府志には常樂院殿廣林禪定門とありて源譽の二字を逸せるも、宗雲寺の古過去帳を調査するに廣林源譽禪門とあり此外同年代古城主の法號を列記せるを見れば廣林源譽禪門は佐野備前守の法號なるを知る云々。

また京都府史蹟勝地調査會報告第五冊文殊智恩寺の條に

同寺ノ墓地ニハ板碑型碑ニテ文明ト明應トノ紀年アルモノヲ存ス、前者ハ高サ三尺二寸銘ハ
前備州廣林源響禪定門
文明十六辰甲年四月二十三日逝去
トアリ、後者ハ二尺四寸ニシテ修
預者春庭寛柔禪尼
明應二甲辰年二月時正日
ト釋讀セラル、ナホコノ外水鉢ノ近クノ小堂内ニ牛肉五輪形碑ニテ天正十一年ト永祿元年ノ刻銘アルモノ慶長四年有銘ノ碑等ヲ記スヘク是等ハ何レモ江戸時代以前ニ於ケル本寺ノ隆盛ヲ察知セシムルモノナリ。

板碑形石碑に保昌塚あり對潮庵の後の山上にあり平井保昌の供養塔なりと傳ふるも定かならず。

第五款　淨土宗寺院

一、寶德山大頂寺

大頂寺、宮津町字金屋谷にあり瑞泰院と號す、阿彌陀三尊を本尊とす、寺傳によれば慶長十一年五月國守丹後守高知犬の堂山上に香華院として建立せしに始まり、男高廣宮津に城郭を築き移住するに當り、其の室壽光院殿(岡山城主池田輝政二女)御養父二代將軍臺德院殿秀忠公及び義光三代將軍大猷院殿家光公、竝びに東照權現家康公御法樂の爲めとして犬堂山より今の地に引移し、精舍を築き寶塔を建て併せて御自分の菩提所となす、後ち阿部對馬守また當寺を菩提寺となし本莊家に至りては、遠祖桂昌院殿一位尼公は大猷院殿家光將軍の北室なるより客殿内に靈屋を造りて其靈を奉祀し併せて同家累代の靈牌を安置し寺領を增して優遇を加ふ、寺運の面目茲に一新す。

寺社免餘高取調帳　曰

大　頂　寺

一高拾壹石三斗壹升貳合

反別　壹町四反壹畝二十壹歩

此　譯

壹石壹斗八合

拾石貳斗四合

宮津藩年中行事

一、二　月　中　　皆原村

桂昌院樣御御供鏡餅被下置候ニ付麻上下着用出仕頂戴之事　　田中村

但爲御禮表御用所へ一同罷出事

七　月　七　日

一、大　頂　寺

御靈殿ニ御備ニ之品々於大廊下迄出懸り見分之事

八　月　朔　日

一、瀧上山初松茸

一、殿　樣　ハ　一盞

一、大　頂　寺　　一盞

一、御靈屋に御備　一臺

右月番御用人中方被指出一覽之上次小姓へ申付御用人中へ下ル取斗御用人衆ニ有之

十一月九日

一、大項寺御靈殿に御初米御備へに付御使大小姓相勤候ニ付月番御用人方御番頭に懸合之上名前被申出候事

十日

一、大項寺御靈殿に御備之御初米御使大小姓誰持參寺僧誰に相渡候由屆申出之由月番御用人被相達候事

宮津府志　曰

寶德山瑞泰院大項寺　在宮津城下金屋谷

淨土宗京師智恩院末

本尊阿彌陀如來　開山眞譽上人

末寺五箇寺

臺德院樣御寶塔　京極高廣公建立

大猷院樣御靈屋

同　御靈屋

但し本堂ノ內一間ヲ以御ニ安置之」

當寺開基年代未ノ詳相傳元在ニ犬堂後山上ニ寛永年中移ニ於今地ニ云。

宮津鄉土誌　曰

寶德山大項寺　淨土宗

本尊　阿彌陀如來

位置　宮津町字金屋谷

緣起　慶長十一年五月國主京極高知の創立にかゝり其後阿部對馬守の菩提所となり本莊家に至りて香華院と稱し臺德院殿德川秀忠大猷院殿德川家光の寶塔を作り以て其靈を祭り又本莊家代々の靈屋を客殿內に造り遠祖桂昌院殿を始め代々の靈を祭る其の結構莊嚴なるは驚くばかりなり。

什寶

聖觀世音菩薩　道眩作

黃金製丈一寸八分　本莊家傳來の念持佛明治四年寄附、觀世音緣日舊六月十四日

本莊家遠祖桂昌院殿一位尼公の靈殿實に莊嚴を極め一位尼公の念持佛も此の靈屋に奉安し、本莊家累代の位牌も本莊家念持佛の觀音も此に奉安す、此の故に金襴御免許にして登城乘輿御免鐵門內冠木御門下乘、禮席は總寺院の上座に置かるゝの榮を擔へり。

證券

宗門軌則金襴衣者非檀林所或不混餘寺之住職は不令聽着候其寺事雖寺格申立候容易難差許然ニ爲東照宮樣御法樂旦爲

臺德院樣

大猷院樣は菩提從京極壽光院殿金襴衣御寄附被成置候由是以眞蹟無之候得者一旦雖差留爲尊靈樣方御追福着用仕度相願候之段難默止　思召を以一代金襴衣

御免許之事ニ候條嚴重可奉祈

御威光倍增尤於他國可斟酌猶又住持更代之節は重而此旨を以可相願者也

明和七寅年八月

山役者　信重院㊞　源光院㊞

役者　清光寺㊞　悟眞寺㊞　正念寺㊞　永養寺㊞　法善寺㊞　聖德寺㊞

丹後宮津　大項寺

前書之通相違無之者也

惣本山五十六世　覺譽花押

㊞　㊞

御領分寺社集覽　曰

乘輿之五ヶ寺御禮席書上

總本山當國中廻頭目代　大項寺

一、當寺は京極丹後守樣ヨリ　臺德院樣　大猷院樣ゟ御寶塔並ニ御霊屋一宇被遊御建立御代々被入尊牌則丹後守樣御菩提所相勤候因茲宮津御領内ニテハ寺院之上座ニ被差置被下候其後御代々御城主樣ヨリモ右之御霊屋ゟ御公儀御位牌被遊奉納候御寶塔御霊屋御崇敬御座候故哉御禮席都而不替上座ニ被差置被下候、最淨土宗門之城主樣之砌は御菩提所被仰付候青山大膳亮樣迄右之通相違無御座候

一、登城之砌者御鐵門冠木御門ニ而古來ヨリ下乘仕り寒暑ハ冠り物等御城内御免被成下候

一、御城主樣　御寶塔御霊屋に御參詣被遊候節ハ御先々ヨリ御長裃ニ而御座候尤モ月々御參詣御裃ニ而御霊屋ゟ斗御參詣被遊候正月初而之御參詣御着城之節トハ御香典　臺德院樣ゟ　白銀壹枚大猷院樣ゟ　白銀壹枚被上候、正月拾七日權現樣ゟ御參詣被遊候節ハ御太刀馬代被上ケ候

右之通り青山大膳樣迄御相違無御座候

乘輿五ヶ寺の内大手門を乘入り更に鐵門を入りて冠木門にて下乘の寺院は當寺のみなり、尤も智源寺は京極家以來切手門を入り鐵門下乘の寺格なりしも一年與丁誤つて門内に入り番卒また大項寺と間違へて咎めざりしより翌年先側おりとて冠木門下乘を書上げたる除外例あるも他の三ヶ寺は皆切手門下乘にて大手門より登城せざるの例なりと。

當寺世代

開山　貞譽上人

二世　圓蓮社鏡譽上人

三世　暢蓮社辨譽上人

慶長二十年七月十二日遷化（七月十三日改元元和元年）

不詳

四世	空運社覓譽上人	不詳	
五世	琴運社傳譽上人	正保四亥年八月十九日	
六世	任運社運譽上人	不詳	
七世	超運社唱譽上人	明暦二申年四月九日	
八世	照運社寂譽上人	同元未年六月二十四日	
九世	敎運社頓譽上人	寛文八申年十一月廿八日	
十世	演運社典譽上人	同十二子年三月三日	
十一世	廣運社大譽上人	不詳	
十二世	要運社法譽上人	元祿八亥年十二月廿七日	
十三世	本運社空譽上人	正德元卯年七月五日	
十四世	鑑運社靈譽上人	享保十五戌年四月九日	
十五世	得運社卽譽上人	同九辰年十二月十七日	
十六世	性運社寶譽上人	同七寅年五月十七日	
十七世	靜運社寂譽上人	元文二巳年十一月十日	
十八世	道運社迎譽上人	不詳	
十九世	光濟社顏譽上人	明和五子年八月十四日	
二十世	妙運社香譽上人	寛延四未年二月十九日	
廿一世	一運社向譽上人	不詳	
廿二世	幽運社搜譽上人	寛政四子年九月十五日	
廿三世	梵運社潮譽上人	文化四卯年十二月十一日	
廿四世	玄運社幽譽上人	天保十三寅年八月十三日	
廿五世	綜運社練譽上人	安政二卯年十二月十二日	
廿六世	法運社得譽上人	慶應二寅年五月六日	
廿七世	大運社慶譽上人	明治七戊申年八月廿五日	
廿八世	行運社慈譽上人	同廿七午年五月二日	五百ラカン
廿九世	桐運社命譽上人	不詳	
卅世	心運社眞譽上人	轉住現存	
卅一世	雲運社祥譽上人	大正四年五月一日	
卅二世	貫運社道譽上人	現住	

當寺鐘銘

丹州與佐郡宮津
寶德山　大項寺洪鐘
本朝京極安智院殿
宮津冶工
木崎與左衛門　藤原家次
鑄直之施主　善右衛門
十五世　卽譽代　傳三郎
享保三年戊五月十八日

また當寺本堂內陣丈三尺三尊佛の兩側双輪塔あり岡本武左衛門の寄附に係り又後門に釋迦三尊の畫あり見事の作なり尙梁上內海、五百羅漢の畫あり寶物には

一、五代將軍綱吉眞筆　壹幅
「母不敬」の橫書、葵紋金襴表裝本莊家寄進
一、宗祖大師御繪傳　四軸
一、涅槃畫像　一幅

境內重なる工作物は

一、臺德院殿供養塔　壹基　寶篋印塔高十尺（寫眞參照）
銘（臺德院殿一品大相國公尊寬永九年壬申正月二十四日）

一、大猷院殿供養塔　壹基　同　上
銘（大猷院殿贈正一位前太政大臣慶安四卯年四月二十日）

一、瑞泰院殿寶塔　五輪塔基高八尺
銘（瑞泰院殿前拾遺眞嚴道可大居士元和八壬戌年八月十二日）

一、[illegible]塔　一基高十一尺
銘（天保八丁酉歲十月造立之）

一、地藏像及び六體地藏　燈爐高五尺六寸
銘（寄進石燈籠地藏尊六體元祿四辛未年二月十五日　施主　酒之助準陳）

此の他本莊資懷墓標、森左兵衛室本莊若葉姫（清操院殿松譽貞心大姉文化七年庚午秋九月十七日）の墓碑などあり、境內接續南方山林は靑山家より寄附せられしと傳ふ寄主靑山秀岩居士の位牌の裏に次の文を刻せり。

池德院秀岩居士姓藤原氏靑山大藏少輔幸實公之子也生武州靑山宿幼時臣傅片谷某奉公命冑之壯年稱片谷金十郎播摩守守督公加家臣之列幸督公仙逝之後有故退去攝州尼崎遁世禿髮盤旋于東武或京師攝河泉之間大膳亮幸秀公移鎭于丹之後州之後亦到宮津卜居于瀧村又移于府中云々。

また境內老松に關し宮津日記曰

明和七庚寅年八月七日晝時分ヨリ大項寺御靈屋高塀ノ內松木見四間斗上ニ杉穴アリ夫ヨリ煙出松木燒候樣子ニ相見エ町中ヨリ駈付右穴ヘ

水ヲ打込候得者少シ煙スクナク相成候其内仙共來リ根本ヨリ切倒シ廣庭ヘコカシ候得ハ鐘樓崩申候鐘ハ以前ヨリオロシ置ケレハ別條ナシ

二、佛光山本誓寺

本誓寺榮照院は前項大頂寺末にして大頂寺の東北に隣り榮昌院とも號す、寛永十九年九月十四日、國主京極高廣の臣落合内藏之助の慈母榮照院光安周寶大信女の逝去するや、孝子内藏之助先妣菩提の爲めに誓譽玄流大德を請して當山を開くといふ。

御領分寺社集覽　曰

大頂寺末

浄土宗　佛光山本誓寺榮照院

境内御年貢地

宮津郷土誌

佛光山榮照院　浄土宗

本尊　阿彌陀如來

位置　宮津町字金屋谷

緣起

開山誓譽玄流上人　京極高廣の家臣落合藏之助の慈母榮照院殿光庵周寶大信女の菩提を弔ふが爲め寛永十一年九月創建せしものなり本殿に安置せる地藏の木像は今を去ること七百六十年餘鎌倉時代康治二年入寂せし興教大師覺鑁の手に刻めり。

什寶

額（護法）一面　花頂宮尊超法親王の眞筆

釋迦牟尼佛一體

當寺世代

開山	本蓮社誓譽上人	延寶五年八月九日遷化
二世	不詳	天和二年五月十一日
三世	體譽岸靈大德	元祿六年二月九日
四世	超譽宗範大德	寶永二年五月二十五日
五世	願蓮社順譽上人	寶曆十年四月七日
六世	不詳	安永五年四月十一日
七世	不詳	天明三年四月十三日
八世	不詳	
九世	信蓮社明譽上人	
十世	迎蓮社慈譽上人	
十一世	重蓮社深譽上人	
十二世	不詳	
十三世	不詳	

十四世　心蓮社聽譽上人　天保八年八月十五日
十五世　本蓮社誓譽上人　文久三年正月二十九日
十六世　光蓮社放譽上人　不詳
十七世　全蓮社貫譽上人　明治二十九年十月四日
十八世　讓蓮社仁譽上人　大正六年五月十二日
十九世　義　豊　現住

當寺門前稲荷の小祠あり、金屋谷中の勧請にて祠前元行者堂別當大行院遺物の石燈籠一基あり高五尺

銘〔日祭宮石燈籠　大行院　金屋谷中　組頭　市左衛門　七兵衛〕〔寛政元酉年九月十一日〕

一、石鳥居明神形一基高七尺横明六尺

銘〔明治四十四年十月〕〔世話人　細見藤吉　朝日力起　近藤虎蔵　淺田喜八郎〕

三、一心山見性寺

見性寺、同町小川町にあり法性院と號す、寶永二年九月傳譽上人の開基にして阿彌陀立像三尊佛を本尊とす、本堂「淨業閣」の額を掲ぐ。

宮津府志　曰

一心山見性寺　京智恩院末　小川町

本尊阿彌陀
開山傳譽上人
焔魔堂　鐘樓門

丹哥府志　曰

一心山見性寺　淨土宗　新町

同書蕪村の條に

一日見性寺といふ寺に遊ふ其寺に白張の襖あり和尚の不在に乘して其襖に墨を以鴉を畫く既にして和尚他より歸り來り其畫を見て大に怒り再ひ蕪村の來るを許さず今其襖宮津の重器となりぬ云々。

金毘羅大權現　見性寺境内

寺寶涅槃像裏記　曰

元祿己卯春予檀中二三子相議曰凡無號何山何寺刹而涅槃厚影无焉也然我寺則城府淨家所魁之一而

元祿己卯季秋十八烏　畫工　洛陽主膳

四世　眞譽祐嵐稽首記

願主　松屋市兵衛　鍛冶屋伊右衛門　飴屋傳兵衛

文久二年十一月九日堂宇悉く積雪の爲めに潰倒し明治貳年五月十五日假堂建立

當寺世代

開山　琴蓮社傳譽上人　正保四亥年八月十九日　大頂寺五世　傳政

二世	松蓮社貞譽上人	延寶八申正月六日	清運寺
三世	念蓮社要譽上人	寶永三戌年八月十九日	
四世	要蓮社眞譽上人	享保十巳年九月十五日	
五世	圓蓮社照譽上人	享保十三申年二月五日	
六世	讚蓮社稱譽上人	同七寅年四月七日	
七世	大蓮社梁譽上人	寶曆三酉年十月晦日	
八世	光蓮社顏譽上人	明和五子年八月十四日	
九世	輭蓮社觸譽上人	安永八年亥六月十四日	
十世	光蓮社轉譽上人	同七年戌閏七月晦日	
十一世	栴蓮社檀譽上人	寛政十年五月廿三日	
十二世	香蓮社馨譽上人	同十二年申十一月十七日	
十三世	香蓮社純譽上人	不詳	
十四世	寶蓮社林譽上人	同十年午十月朔日	
十五世	光蓮社明譽上人	不詳	
十六世	光蓮社現譽上人	文化六年十二月二日	
十七世	圓蓮社宣譽上人	同十年酉正月廿七日	
十八世	神蓮社棲譽上人	同十五年六月十二日（五月十一日改元文政）	
十九世	進蓮社精譽上人	文政四年巳六月五日	
二十世	閑蓮社進譽上人	嘉永四年正月十四日	
廿一世	猛蓮社勇譽上人	文久元年七月廿七日	
廿二世	頓蓮社融譽上人	同二年八月十四日	
廿三世	天蓮社光譽上人	明治二十八年八月　日	
廿四世	圓蓮社光譽上人	丹波稱名寺轉住	
廿五世	大蓮社乘譽上人	岡田天然寺年住	
廿六世	慧蓮社戒譽上人	現住	

鐘樓門天明五巳年三月十二世馨譽上人代大坂屋直七の奔走によりて建立安政二卯年六月修復明治十九年八月營繕。

鐘銘

銘曰

佛法王法　億萬斯年

不斷香燈　夕陽諸經

丹州與謝郡宮津城畔

一心山見性寺常什

維時延寶五紀丁巳初冬日

譽　眞　譽

譽　照　譽

工作物には開基墓標高八尺五輪塔五世照譽上人墓碑寶篋印塔（享保十三申天）あり、境内閻魔堂あり十五像を安置す延寶四年六月十五日永井家の臣淺井左衛門尉利政の篤志によりて建立し明治十九年七月營繕當寺鎮守として金毘羅權現を齋く。

寺藏文書　曰

鎮守之儀御屆之寫書　寺社奉行、奉り名寫

口上覺

鎮守堂建立慶安元子年御城主京極高廣公御代小社有之候由大頂寺十九世顯譽和尚當寺ゟ隱居仕則明和五年子八月十四日遷化也此時迄隱居所有之其側ニ小社御座候所（中略）當寺十四世代林譽文海和尚御城主様爲御武運長久國家安全之蒙御役所御許容寛政六寅年十月五日再建成就（中略）同年讃州金毘羅（へ）參詣仕箱入大札有之候但し當寺之鎮守金毘羅木像之儀岩石上ニ而座像凡三寸程之尊體寶劔ヲ持安置最も作人は相知不申候云々。

寺院明細帳には「般若堂、本尊般若王、寶永二年十月一日當寺四世眞譽祐岸創立元金毘羅神ヲ安ジ明治二年一月十日故有テ之レヲ改メ置ク」とあり、維新の剖判により當分般若堂など名つけたるものならん。堂前石燈籠三基あり何れも花崗石宮立形高六尺あり。

内　一對、銘（御家中寄附）（文化八辛未年三月吉日）

一基、銘（爲海上安全）（嘉永元戊申年九月吉日）

曰、光明山悟眞寺

智恩院末にして前項見性寺の西に隣り淨業院と號す、寺院明細帳によれば元和二年三月一日創建開基光譽悟眞上人、延寶年中丙王の災に罹て灰燼し天和元年五月十日阿部對馬守再建すといふ。

宮津府志　曰

光明山悟眞寺　在宮津城下小川町

淨土宗京智恩院末

本尊　阿彌陀如來　開山　光譽上人

當寺世代

開山　心蓮社光譽上人　寛永八辛未年三月廿五日遷化

二世	誠蓮社明譽上人	明暦二丙申年十二月十九日
三世	大蓮社岩譽上人	寛文四甲辰年四月三日
四世	要蓮社法譽上人	同十一辛亥十月十五日
五世	三蓮社品譽上人	天和二壬戌年三月廿八日
六世	本蓮社全譽上人	（天和四年梵鐘鑄造遷化年月日不詳）
七世	清蓮社香譽上人	元祿十四辛巳七月十二日
八世	圓蓮社淨譽上人	正德四甲午年五月七日
九世	乘蓮社眞譽上人	正德六乙申年二月七日
十世	本蓮社不問和尙	享保三戊戌年十二月二十七日
十一世	迎蓮社還譽上人	延享元甲子三月二十八日
十二世	昇蓮社亨譽上人	明和四丁亥年五月六日
十三世	宣蓮社敎譽上人	安永癸巳年十二月四日
十四世	讚蓮社嘆譽上人	享和元辛酉年三月三日
十五世	敎蓮社闡譽上人	文政四辛巳年八月六日
十六世	轉蓮社輪譽上人	不詳
十七世	淸蓮社澄譽上人	天保乙未六月朔日
十八世	成蓮社佛譽上人	不詳
十九世	敬蓮社崇譽上人	弘化四丁未年七月二十六日
二十世	莊蓮社嚴譽上人	安政五戊午年十二月七日
二十一世	歡蓮社嚴譽上人	明治七甲戌年八月十日
二十二世	現蓮社存譽上人	明治十六年未四月二十一日
二十三世	薫蓮社香譽上人	不詳
二十四世	明蓮社英譽上人	明治二十九年申八月十五日
二十五世	聽蓮社諦譽上人	中郡峯山町常立寺へ轉住
二十六世	法蓮社德譽上人	加佐郡舞鶴町淨土寺へ轉住
二十七世	法蓮社海譽上人	福井縣敦賀町善妙寺へ轉住
二十八世	光蓮社榮譽上人	乘阿無量樂邦誠信和尙現住

當寺鐘樓門塗るに丹堊を以てし美觀を添ふ。

鐘銘

銘並引

丹之後州夜寒郡宮津庄光明之山
悟眞之寺蓮門雖已舊法輪而常新
但以未曾有建推以報長昏者人或
爲闕焉於是乎途發意既勸篤信普
募檀緣喜捨不約而集如響之應聲
也千斤銅鏈不日而成焉

銘曰

巨鐘已就　新懸梵宮　振動塵刹　扇起眞風
永拔幽冥　頓證圓通　豐山霜冷　千圍月崇
利民福國　鎭山警衆　佛德檀信　千秋無窮

天和四歳次甲子三月十有五日
當山六世住持　本蓮社來阿全譽寂靜淳月
造鐘且誌銘

鑄師宮津住　吉左衛門尉藤原兼次
同　彦左衛門尉

門前慈眼堂あり本尊木彫正觀世音立像高三尺なるを安置し右に千手觀音左に不動明王座像を祭る高五尺、毎月十七日緣日賽者多し。前に水石あり。

銘（手水石元祿十一年五月吉日）

五、大悲山無緣寺

無緣寺　前項悟眞寺の西北に隣平等院と號す、本尊阿彌陀三尊座像開山笑譽吟雪和尙元祿二年五月十五日創立といふも爾來傳記なければ總て詳かならず。

丹哥府志　曰

大悲山無緣寺
附錄　瘡守稻荷大明神

當寺世代

開基　竭蓮社正譽吟雪比丘　寶永四年二月十三日遷化
二世　敎蓮社心譽存長比丘　元祿十四巳年四月十八日
三世　不詳
四世　不詳
五世　諦蓮社誠譽存周和尙　不詳
六世　高蓮社才譽智察和尙　元文五庚申五月廿三日
七世　不詳
八世　不詳

九　世　法蓮社輪譽卓雄和尚　明和三丙戌年十二月廿日
十　世　不　詳
十一世　不　詳
十二世　不　詳
十三世　不　詳
十四世　專蓮社單譽察門和尚　寛政十一己未年七月廿六日
十五世　不　詳
十六世　專蓮社念譽辨隨和尚　文政三庚辰年七月廿三日
十七世　定蓮社香譽良湛和尚　天保三辰年十一月十七日
十八世　豊蓮社民譽良的和尚　同　十一子年正月廿六日
十九世　願蓮社諦譽寛誠和尚　同　十四卯年九月二十日
二十世　不　詳
二十一世　觀蓮社審譽諦定和尚　元治二乙丑年三月十九日
二十二世　金蓮社剛譽滿戒和尚　慶應元年五月二十六日
二十三世　觀蓮社在譽隨音和尚　明治二十二年三月十四日

二十四世　本蓮社誓譽稱念比丘尼　大正六年二月七日

當寺鐘銘

夫鐘者詣佛之心源衆生
成佛之直道也鳧鐘之響
一歴耳根成佛之種子也
所以經曰若打鐘時三悪
道一切苦惱停止五百億
劫重罪滅降伏魔悪除盡
干時享保七壬寅龍集五月佛日
丹之後州夜寒郡宮津庄
大悲山無緣寺五世中興開山
諦蓮社誠譽存周擬心代
治工　内田吉左衛門兼良
内田彦左衛門貞安
攝津國屋八郎兵衛法名慶德妻妙智
獵師町大工孫右衛門戒名道法妻壽法
當町中志之衆中當寺擔中現當兩益
三界萬靈聖衆寺

門の傍に鎮守瘡守稲荷といふあり、陀吉尼天を奉祀し三月二十七日緣日とす。

六、聖衆山西方寺

西方寺　前項無縁寺の前方小川町の丘上にあり、宗光院と號す丈二尺八寸阿彌陀佛立像を本尊とし脇侍は後の新添なり、宗譽上人永祿三年五月の開基なりと傳ふるも詳かならず、堂に「西へゆく道より外は今の世に浮世を出つるかうやなからん　西方蓮社」の額を掲ぐ明和三丙戌中冬掲る所といふ、世代不詳。

什寶としては圓光大師妙號一軸を藏す、檀家約二十戸、當寺梵鐘なく半鐘を吊る銘曰

奉寄進鳴鐘
志趣者
光顏智英信女
爲　幻葛童女
昌巖慧長信士
願主　糀屋
爲　松譽壽榮信女
正譽道山信士
丹後宮津四方寺
什物　白道代

境内愛染明王を祀れる鎮守の小祠あり。

七、心光山法雲寺

法雲寺　宮津町字木之部にあり阿彌陀佛を本尊とし安譽上人開基といふも爾來傳記の徵すべきものなし。

宮津府志曰

心光山法雲寺　在宮津城下水邊町
淨土宗智恩寺末　當時無住
本尊　阿彌陀　開山　安譽上人
開基年代未ノ詳

世代不詳。

八、道本山清運寺

清運寺　城東村字波路小字寺ノ下にあり、本尊阿彌陀如來開山宮津新町見性寺二世貞譽南岸上人延寶二年二月の創立といふ、丹後寺帳及び宮津領寺社名前帳みな宮津波路町清運寺とあり、因と城下なりしもの今城東村地内に屬せり梵鐘にも宮津町とあり。

鐘銘曰

維之享保四亥年卯月八日
丹後與佐郡宮津波路町
道本山清運寺十世
中興　印譽代
冶工　與三左衛門

發起　念佛講中

境内寶德有銘の板碑形地藏像あり幅一尺二寸高三尺五寸火風空三輪屋根形となり中央地藏像半肉浮彫に仕立て下に「十一月十九日十一人」「寶德元年」寶德は後花園天皇の紀年にして文安六年七月二十八日改元二十九日以後寶德元年にて今玆大正十三年を遡る四百七十五年なり。

大正十三年七月二日橋立新聞第八百五十六號清運寺の板地藏と題し、

波路の清運寺は寺傳に依れば延寶二年二月宮津新町見性寺二世松蓮社眞譽南岸上人の開基と云ひ、寶曆九年前宮津城主青山侯から新城主本莊侯へ引繼いだ丹後國拜領地寺社名前取調帳に淨土宗京都智恩院末寺城下波路町清運寺とあり、現在同寺の梵鐘にも享保四亥年卯月八日丹後興謝郡宮津波路町道本山清運寺十世印譽代云々の鐘銘がある、當時は無論御城下の町であつたらしいが今は城東村に屬して居る、當寺の境内に四百七十五年前の古地藏が半ば土に埋もれ落葉に隱れて寂然として一基在りし昔を物語つて居るも哀れである、幅一尺二寸高約三尺五六寸、火風空の三輪全く屋根形となり水輪該當の部に地藏像を彫み下方地輪該當の部に寶德元年十月十七日十一人の刻銘がある、寶德は後花園天皇の紀年で文安六年七月二十八日改元二十九日以後が寶德元年である、丁度足利の室町幕府時代の中頃で先づ此の地方では珍なものである、府中村の妙立寺に寶德二年二月記錄の名號碑が一基あるより外には未だ見受けぬ、兎も角貴重なる遺物であるから何とか保存の方法が講じたいものである。

第六款　日蓮宗寺院

一、長久山本妙寺

本妙寺　宮津町字金屋谷にあり、本尊妙號寶塔釋迦多寶二佛、四天形、寛永二年國主高廣の室壽光院殿の歸依により創立せしものにして寺領三十石を附せしといふ京極家斷絶後寺領減ぜしと雖も猶城主菩提寺同額を保持せり。

寺社免除高取調帳　曰

本妙寺　　皆原村
一高拾壹石參斗壹升貳合　　田中村
此譯
四石五升五合
七不貳斗五升七合

の條あり御城下に於て拾壹石の寺領を有するは大頂寺と當寺のみなり。

宮津府志　曰

長久山本妙寺　在宮津城下金屋谷
日蓮宗京妙顯寺末
本尊　釋迦　多寶　開山　日賢　上人
壽光院殿石塔
京極高廣公之室而池田輝政之女也萬治二己亥年六月四日卒號三壽光院殿昌榮日慈大姉

丹哥府志　曰

長久山本妙寺　日蓮宗開山權大僧都日賢
金屋谷

京極高廣の室は他田輝政の女なり萬治二己亥年六月四日卒す法名を壽光院殿昌榮日慈大姉といふ今境内に其碑あり。

附錄　香神堂　大黒堂

日蓮宗大觀　曰

本　妙　寺　京妙顯寺末　緋一八　宮津町　鈴木眞靜

由緒沿革　長久山と號す、寛永二年四月池田輝政の女京極丹後守高廣公の北堂壽光院殿、本宗に歸依し御養父二代將軍臺德院殿御菩提の爲めに當山を建立し、田邊妙法寺住持大僧都佛乘院日賢上人を開山とし其弟子湛應院日遙上人住持す、當時黑印三十石を下賜せられしが京極家斷絶して寛文九年以後は十一石三斗一升に減ぜられしも世々の城主は參拜崇信せり、本堂は嘉永年間日要上人の再建にして、寺寶に三菩薩の本尊を藏す、天の橋立、瀧上溫泉、金引瀧等皆近し。

當寺世代

開　山　權大僧都　佛乘院日賢法印

二　世　湛應院日遙大德

三　世　正法院日永聖人

四　世　天龍院日運聖人

五　世　本壽院日長聖人

六　世　定智院日迫聖人

七　世　稱理院日達聖人

八　世　立行院日妙聖人

九　世　深廣院日透聖人

十　世　元享院日貞聖人

十一世　本具院日勇聖人

十二世　貞妙院日沅聖人

十三世　啓運院日道聖人

十四世　無等院日等聖人

十五世　圓盛院日孝聖人

十六世　唱要院日遂聖人

十七世　本理院日達聖人

十八世　妙事院日進聖人

十九世　本唱院日要聖人

二十世　遠妙院日道聖人

廿一世　啓順院日事聖人

廿二世　王子院日龍轉住

廿三世　宣妙院日弘轉住

廿四世　無名院眞靜　現住

當寺梵鐘銘

銘曰

蓋法鐘者　精舍法式
求法寶具　打晝夜時
讃佛讀經　勸緇素道
降伏四魔　斷惑生善

奉　寄　進

願主抽懇丹一鐘既滿寄附斯足庶幾擬先考
善生院了世虔等正覺矣恃垂本領並緇素奉
加之存亡二世大願成滿矣

施主　宮前七郎兵衛尉
　　並十方檀越
丹後國與謝郡宮津庄
長久山本妙寺住寺者
當山第二祖正法院日求（花押）
維時寛永二十一暦甲申三月二十八日
欽撰　敬書

境内毘沙門天堂及び妙見天堂あり、背後の丘上壽光院殿の墓碑あり、五輪塔三尺二寸角高十尺、其地輪に壽光院殿昌榮日慈大姉萬治二己亥年六月四日と刻す、巍然として金屋谷の一偉觀たり、尙ほ當寺境内重なる工作物は

一、同前大題目塔高十尺一基

銘（日蓮大菩薩五百回忌御報恩）（天明元辛丑年十月十三日　宮津三ヶ寺總檀中）

一、同上寺號標示塔一基

銘（蓮心院好玄日信）（仙壽院妙久日長）

一、妙見堂前石燈籠一對高七尺

銘（文化五龍舍）（戊辰五月十六日　日遼代）

一、同上狛犬一對

銘（明治三十四年六月　日）

一、毘沙門堂前石燈籠一基高九尺

銘（嘉永五年歳次壬子）（九月吉祥日建之）

一、本堂前石燈籠高六尺一對

銘（奉寄進石燈籠）（萬治二年六月吉日　京極信濃守高勝）

此の他當寺墓地内には鞍岡恭倫及び文政一揆にて有名なる栗原百助の墓碑あり、前者は「文中院刀義日泰居士（生文政六癸未年十月十三日鞍岡四郎右衛門恭倫維時嘉永四亥年十月八日行年廿九歳絶）」後者は「通玄院殿光刃顯忠居士（栗原百助藤原頼之文政九丙戌年二月十六日行年四十歳）及同理右衛門頼房法名命日」を刻す。

二、本城山經王寺

經王寺　前項本妙寺の南に隣る、本尊寶堵釋迦多寶、關山日依上人慶長二年興謝郡本庄村眞言宗稜巖寺より分れ改宗して日蓮宗となりしといひ山號爾來本庄山と云ひしも藩主代りて本庄家の來るに及び藩主に憚りて本城山と改稱せしといふ。

寺社免除地取調帳　曰

經　王　寺

一高三石七斗七升五合

此　譯

壹石九斗四升六合　皆原村

壹石八斗貳升九合　田中村

此寺領は京極高廣の女了智院殿妙堯日清大姉の爲めに京極家より附せられたるものなりと。

丹哥府志　曰

本城山經王寺　日蓮宗開山權大僧都日佑　本妙寺の次

了智院殿妙堯日清尊祇は京極高廣の女なり慶安四年卯年正月十九日卒す今境内に其碑あり。

附錄　番神堂　鬼子母神

日蓮宗大觀　曰

經　王　寺　大光山末、中末三、緋、一九　宮津町金屋谷　三神良直

由緒沿革　本誠山と號す、開基京極高廣公、開山大僧都日依上人、創立慶長七壬寅年五月、開山は信州增鹽の館内、星野源治貞善の次男なり、天台宗飯田覺正寺の速戒によりて薙髮し、後比叡三井に遊び一心三觀の微旨を探る、會ま大守清花家德の歸依を受けて猶子となり、官、權大僧都を賜る、後本國寺の日助上人鳴瀧の日通上人に隨ひ本化の宗致を叩き、岩本に遊び小四日誓上人に遭ひ、豁然として改宗し岩本實相寺歴住となる。其後丹後を歴遊し、與謝郡本庄村眞言宗楞嚴寺（七堂伽藍備り北條氏の祈願所たり）を宗論の末改宗せしむ、時の藩主京極高廣公の歸依を受け、慶長七年五月寺を現地に移し本誠山經王寺と改め、爾來藩主の息女了智院殿妙堯日清尊儀の香華寺となり參石七斗七升五合の黑印を奇せらる（維新の際廢印）現今の末寺本庄淨國寺は當山舊趾の末寺多聞寺にして、加佐郡河守町妙雲寺は了智院殿の寄附によりて開基され、殘妻の妙國寺は宗論の上改宗せしめしものか、寺寶に藩主寄附の金屏風一双茶器梵鐘（今上陛下皇太子殿下に在し山陰台臨の砌に御上覽に供す）及び本庄公感得の祕佛摩利支尊天、紺紙金泥法華經（十五世潤受院日廣上人の時本山二十六世日達大僧都より拜受）を藏す、特に弘化元年泰譽日觀上人の再建せる八間半の本堂の龍の繪は時の畫家屏山氏の筆に成り、技神に入る、附近に天の橋立の名所あり。

當寺世代

開　祖	善行院日依權僧都上人	慶長十七年子五月九日遷化
二　世	東公院日英聖人	遷化年月日不詳
三　世	本光院日宜聖人	同　上

四世	了祥院日祥聖人	遷化年月日不詳
五世	妙行院日清聖人	寛永十四年丑七月廿七日
六世	智光院日順聖人	延寶五年巳正月十三日
七世	玄靜院日登聖人	元祿八年亥七月廿七日
八世	正光院日生聖人	元祿十四年巳二月十三日
九世	玄智院日榮聖人	享保四年亥二月朔日
十世	信受院日珠聖人	寶永元年申六月十九日
十一世	圓乘院日性聖人	寛保二年戌五月七日
十二世	正德院日陽聖人	享保十六年亥七月十一日
十三世	本蓮院日通聖人	同六年丑四月二十日
十四世	妙心院日觀聖人	同八年卯九月十四日
十五世	潤受院日廣聖人	寛保元年酉八月二十三日
十六世	容受院日盛聖人	明和四年亥十一月二十九日
十七世	本妙院日脩聖人	遷化年月日不詳
十八世	喜見院日隨聖人	寶曆八年寅正月二十四日
十九世	智光院日德聖人	明和二年酉正月二十一日
二十世	一乘院日遼聖人	寶曆十一年巳十二月十八日
二十一世	慈善院日光聖人	天明元年丑十月四日
二十二世	菩提院日體聖人	同八年申八月十六日
二十三世	本弘院日誓聖人	文化十一年戌六月八日
二十四世	本地院日長聖人	享和二年戌二月二十四日
二十五世	顯了院日泉聖人	天保二年卯二月十五日
二十六世	泰壽院日觀聖人	嘉永五年子五月二十八日
二十七世	龍護院日逮聖人	同六年丑五月十三日
二十八世	龍智院日穀聖人	文久三年亥十二月十六日
二十九世	幽遠院日到聖人	明治九年子八月九日
三十世	信翁院日迨大僧都	同四十一年未三月七日
三十一世	大講師文龍上人	轉住
三十二世	大講師英宣上人	轉住
三十三世	大僧都廣敬院日仁上人	現住

當寺寶物に京都本國寺より下賜の紺紙金泥法華經八卷あり。

紺紙金泥法華經卷頭

奉獻上紺紙金泥妙典御經壹部八卷

嚴有院殿贈正一位大相國公尊儀　大津源兵衛尉重信

御寶前　元祿五壬申暦五月八日

第一卷の勞頭

丹後國宮津本城山經王寺十五世潤受院日廣遺意堅固新造營兩尊其餘有勤續依茲紺紙金泥御經全部寄附之永爲其寺寶重者也

享保十二丁未年二月十三日　大光山二十六世　大僧都日達　花押

一、宗祖立正大師御眞蹟　一幅

但　涅槃經要文斷片　天正十五丁亥年十月十三日　身延山日進上人極メ入附

一、藩主本莊侯寄附金屏風　一雙

但　大正天皇皇太子として行啓の砌　台覽に供したるもの

その他本莊家茶器もあり。

天保十四卯年十月會式夜より降雪十五日本堂軒瓦十四五枚崩落翌十六日朝四ッ時本塔潰倒し、十七世日觀上人弘化元辰年再建に着手し嘉永四亥年四月棟上、正面經王梵宮の額を掲げ内部天井雲龍の繪あり、山家藩御抱繪師和田屏山の筆に成り其の技また神に迫る、屏山此の大作の落款に用ひたる石印は今眞照寺墓地にあり、前に姥妣姉兄の法名を刻み裏に屏山と刻す、幅九寸七分高一尺三寸五分あり、畫龍の頭一間半以上あつて其の大きさに於ては繪畫落款ともに界隈この右に出づるものなかるべし。

當寺鐘銘

了智院殿妙堯日清尊儀　承應二年癸巳正月十九日　本城山　經王寺

主なる工作物

一、花崗石手水鉢一個

銘　（經王寺手水石）（了智院殿妙堯日清）慶安四辛卯歲正月十九日

一、同千部經供養塔高十二尺一基

銘　（奉誦讀千部經塔）（天明五龍集乙巳歲季秋如意日建之　當山日誓）

一、同無緣供養塔高十八尺一基

銘　（荒歲死亡無緣群靈）（天保八年龍集雲丁酉冬十月　宮津宗門中）

一、石燈籠一對高六尺

銘（天保十二丑年九月建之）

一、山門前經塔一基

銘（庫裏再建一字一石礎納寛政四壬子玄冬良辰日長代維時寛）

當寺觀音堂聖觀世音を祀る貞享五年新井頼母の建立せる所なりと、厨子銘あり、曰

奉造立、觀世音菩薩尊像安置一宇堂、

右意趣者爲悲母長松院妙常日久幽儀沒後孝養開覺得悟營之、若尒者聖容遙映三途之迷土遠令離苦界籠獄、慈嘉早開凡愚之意地速得證回備之果德乃至功德餘薰、周匂九界之圓凡聖等預現當二世勝利而

丹後國與佐郡宮津庄本城山經王寺安置之

貞享五龍集戊辰三月吉祥日　功德主　孝子頼母藤原繁勝

大光山本國教寺二十世正統僧正日隆

龕前鰐口を吊るす、前記頼母の嫡嗣又治郎の寄進にて其銘　曰

奉寄進鰐口一個丹後州宮津本城山經王寺境内觀世音菩薩御寶前

右志趣者祖母長松院妙常日久靈儀拔苦與樂證大菩提而已

干時貞享五戊辰稔九月吉祥日　追孝嫡孫　新井又治郎藤原繁明

當寺鎮守に鬼子母神堂あり訶梨帝母天を祭り又本莊侯御預けの摩利子天像一軀を安置す。

春秋のうつるも知らであけくれ　右大將愛德卿

鶯の御山にすめる月かげ

當寺末寺三ヶ寺加佐郡河守町妙雲寺、與謝郡本庄村淨國寺同郡六萬部妙國寺これなり。

三、功德山妙照寺

妙照寺　宮津町字金屋谷にあり、本尊法華寶塔釋迦多寶十形像、寺傳文安甲子九月日養上人開基永正四年の兵燹に罹り翌五年再興せしといふ、城主阿部對馬守日蓮宗に歸依し重臣內藤景貞また當寺に葬る。

宮津府志　曰

功德山妙照寺　在宮津城下金屋谷

日蓮宗甲州身延山久遠寺末

本尊　釋迦　多寶　開山　日養上人

寺記曰永正五戊辰年九月一色義有建立云々。

丹哥府志　曰

功德山妙照寺　日蓮宗

附錄　番神堂、七面堂、祖師堂、千佛堂

日蓮宗大觀　曰

妙照寺　身延末素、一九　宮津町　玉木大讓　大町圓勇

由緒沿革　功德山と號す、開基丹後府中の城主一色義嗣、開山實敎院日養上人創立文安元甲子年九月、永正四丁卯四月兵火に罹り同五戊辰年現地に移轉す、當地各宗を通じての古刹とす、寺寶に宗祖一遍首題、祐慶作二尺五寸の七面天座像、日朗上人作一尺八寸の宗祖御

座像、其他日朝日親上人本尊等を藏し、日本三景の一たる天の橋立は僅かに半里にして遠す。

當寺歷代

開山　寶敎院日養聖人　長祿三年己卯八月十六日　遷化壽百十才

二世　修養院日有上人　文明十三辛丑天二月五日

三世　高勝院日儀上人　永正八年辛未四月八日

四世　法善院日安上人　大永五年乙酉八月十一日

五世　玄受院日仙上人　弘治四年戊午二月二日（二月二十八日改元永祿元年）

六世　法智院日壽上人　慶長十六年癸亥正月七日

七世　實光院日陽上人　同二十年丁卯二月十五日（七月十三日改元元和元年）

八世　大泉院日受上人　元和六年壬申十一月八日

九世　善國院日穩上人　寛永十四年己丑九月十六日

十世　本持院日助上人　寛文八年戊申三月七日

十一世　壽泉院日詠上人　元祿十丁丑年二月十六日

十二世　空如院日觀上人　元祿十五年壬午九月十六日

十三世　聞隨院日融上人　正德六年丙午三月十三日

十四世　妙悟院日慶上人　享保十年乙巳五月十五日

十五世　守玄院日長上人　寶曆四年甲戌五月二日

十六世　守要院日迨上人　寶曆九年己卯九月二日

十七世　本玄院日秀上人　明和元年甲申十二月十四日

十八世　體具院日戴上人　同七年寅閏六月二十七日

十九世　大慈院日經上人　寛政十二年甲申十一月十日

二十世　心王院日豊上人　寛政八年丙辰七月十八日

廿一世　禮妙院日守上人　不詳　喜見院日禮上人改號（越前大蓮寺）

廿二世　心空院日過上人　文政四年辛巳十二月四日

廿三世　禮孝院日道上人　文久二年壬戌七月十四日

廿四世　誠心院日喜上人　不詳

廿五世　榮光院日寛上人　明治七年十二月十六日

廿六世　榮中院日光上人　明治四十四年二月廿五日

廿七世　榮信院日起上人　榮中院日光上人山科ニテ改號再住

廿八世　圓龍院日源上人　大正五年十二月十日

廿九世　圓勇院日正上人　同七年十一月十七日、

三十世　上晃院日謙　現住

妙照寺鐘銘

往貞享寅暦　詠公普觀衆　以求金銅資
遂得成一鐘　惜哉有聲數　可謂闕巨益
循故規更新　補先闕再完　是古今業也
故古以改之　備永劫寺珍　誠音色如雲
莫所不能通　而此士耳利　化法界迷群
豈聽超梵鐘

銘曰

六塵教體　廣被衆群　無邊音聲　普餘迷雲
華嚴雷響　長降魔軍　此土勝益　正在普聞

豈享保十三戊申歳五月吉辰　功德山妙照寺

十五世　日　長

丹後宮津住鑄工
藤原朝臣　木崎興三左衛門尉次廣

當寺祖師像、大本山身延より拜領の由なるが足利末世の作ならんか、本尊其他佛像も可なり古るし、大黒天像題目塔及び千體佛等あり、七面堂に安置の七面天女丈二尺餘元祿佛かと思はる、又阿部侯の牌あり。

寶境院殿秋岸日嬉大叔　延寶九辛酉年九月二日　當城主阿部氏正盛公之御前

工作物には門前法塔五重臺上（高十五尺）

銘（天保辛卯初冬念三　二十四世　日喜代）

追加

加藤清正公銅像、大正十三年五月四日除幕開眼花崗石四段積基上六角柱高十一尺銅像高六尺、同月六日橋立新開曰

清正公の銅像盛大な除幕式

宮津町の清正公萬人講發起にかゝる清正公銅像除幕式は四日午前十時同町の妙照寺内に擧行したが大立目商業學校長以下町内有力者の參列あり日蓮宗信徒其他善男善女の參詣者多數あり賑やかであつた。

當寺墓地内阿部侯家老内藤角右衛門及び其の兩親の墓碑あり。

（圓珠院光德日實　慶安元年十月二十二日　施主　内藤景貞
（圓乘院妙體日悟　元祿四年六月二十一日
圓妙院玄春日槃　元祿五申三月廿八日　俗名　内藤角右衛門景貞

内藤角右衛門は近藤五郎左衛門と共に延寶九酉年（九月廿九日改元天和元）主君對馬守國替に際り宮津へ先着四月二十五日宮津城を受取りし重臣なり。

第七款　眞宗寺院

一、金谷山佛性寺

佛性寺　宮津町字金屋谷（西堀川見附）にあり、寛永年中京極高廣田邊より宮津城に移るの時に田邊瑞光寺より順誓上人高廣に從つて此に來り精舍を經營し金谷山佛性寺と號す、本尊阿彌陀三尊外に成相寺より飛來の彌陀像あり、本堂、祖師堂、庫裏方丈經藏鐘樓山門完備し市街中央の雄鎮たり。

寺社免除高取調帳に曰

佛性寺

一高壹石七斗貳升六合

宮津府志曰

佛性寺　在宮津町金屋谷　皆原村

一向宗　京本願寺末　余間之一家

本尊阿彌陀如來　安阿彌作　開山　明誓

寺記云開基明誓ハ若州小濱天ヶ城主內藤伊賀守五男ナリ細川幽齋公猶子トシテ本願寺顯如上人ニ請テ田邊ニ於テ瑞光寺ヲ健立ス幽齋公田邊籠城ノ時ハ明誓京師ニ遊學シテアリシカ田邊城攻ノ由ヲ承リ夜ヲコメテ立歸リ徒黨ヲ催シテ共ニ籠城ス此賞トシテ幽齋公ヨリ田邊寺內町百軒餘ヲ瑞光寺エ寄附ス後京極高廣公當城ニ移ル時瑞光寺ニハ二男ヲ住持トシ嫡子順誓當地ニ移テ當寺ヲ經營ス宮津ニテハ町地

然ク右寺內町ノ替ニ寺地ノ地子竝ニ寺近邊ノ山林ヲ給ル、後當國一寺一向宗ノ棟梁タルベキ旨高廣公ヨリ文書ヲ給ハルト云。

佛性寺鐘銘

丹州宮津佛性寺鐘銘竝序

夫人之明了佛性方便多途就中通達自在莫如音聞其善鳴而應於耳者八音之中金爲之大金之中鐘爲最大寶公口衆生定樂不可卽滅唯聞鐘聲其苦暫息耳是故佛宇不可無鐘也丹州宮津有寺名曰佛性其爲宗也專念彌陀往生爲要不從事於戒定慧學亦利物之一端也同鄉鈴木氏定治檀越干寺商賈爲業家也巨富然而不爲浮榮所盪深信此宗寺以無鐘爲恨因捨家資命工鑄鑄鄉人勠力不日成之寔延寶甲寅仲春仲浣也定治祖了喜父宗秋共尊崇之寺每有事不厭苦勞不惜財寶親助成焉往年佛閣改造宗秋之功幾多焉可謂定治能繼志述事矣所作善利奉爲祖考妣追薦冥福也一日請干作之銘予謂言被金石今古所愼也雖然峻拒之則定治善行無聞干世因述俚語爲銘且記大要爲序云爾

銘曰

洪鐘在簴　見者恭敬　幽冥啓發　人天號令
直下返聞　六根清淨　善哉功德　圓通佛性

延寶八年歲在庚申仲春上浣

天橋山主雲山等宥書

現住佛性寺　順勝

先是檀度鈴木定治鑄一鐘寄附干佛性寺其志可嘉矣星霜旣移一旦擊破之堪慨嘆今玆元祿戊寅初冬上浣孝子鈴木滋治繼嚴父定治之先志再鑄鑄乙寄干本寺於戲其功其德偉矣

佛性寺主順當誌焉

冶工　洛陽釜座住　近藤丹波椽佐久

當寺世代

開山　明誓上人　寛永九年十一月十六日示寂
二世　不詳
三世　不詳
四世　不詳
五世　順空上人　明和八年正月二十九日
六世　順義上人　安永五年十月十五日
七世　順示上人　享和元年七月十二日
八世　順照上人　同三年九月十日
九世　順達上人　文化十四年正月二十日
十世　順識上人　文政十一年十月十七日
十一世　順知上人　安政七年二月二日
十二世　順信上人　明治十年十月十九日
十三世　得永　現住

二、閑雲山眞照寺

眞照寺　宮津町字小川町、本尊阿彌陀如來、開基岡美太郎、竹野郡宇川村中濱の住人其のもと若州遠敷村にありし平家の落武者なりしといふ、固と有田村にありて天台宗のところ火災に罹りて天正三乙亥年大久保山に移轉し一色五郎義俊の祈願により本願寺十一世顯如上人より寺號公稱の允を得、のち京極高廣の代に今の地に移せしと傳ふ、慶應四辰年（九月八日改元明治元）七月十八日山崩の爲めに庫裏壞倒五人壓死し、明治十五年十二月二十七日火を失し本堂その他烏有に歸し翌十六年再建今の堂宇なり、樓門閑雲の額あり。

宮津府志曰

眞照寺　在小川町
一向宗佛性寺末
本尊　阿彌陀　開山　未詳
寺記燒失故開基年代未詳、相傳フ古來本願寺直末寺タリシニ中古佛性寺丹後一國一本寺ト定リシヨリ其末寺トナレリトソ

當寺鐘銘

丹州與謝郡宮津眞照寺第六世住持惠海是歲丁未之春慕衆新鑄大鐘意願報法筵干遐邇奬勸邑里信徒晨詣夕拜令其謝德行業轉勇進也轉化之功可謂勤矣海也昔年在浪華之日屢遊于余門因遠告事問銘於余願余之撲樕辱其人乎

然而但於法眷之素豈不隨喜此盛事也
所以輒書之塞其索云

銘曰

眞照古佛場　鑄成法器全
晨昏流遐邇　緇素赴善緣
普蒙誘法鼓　徹冥放全道
利益齊大敎　寔無量無邊

享保十二龍集丁未初夏朔旦
涙華定專坊現住釋月溪謹識
眞照寺見住惠海
冶工　當宮津住
木崎喜右衛門金安

寺寶黑本尊木彫阿彌陀如來立像丈一尺四寸五分、寺傳聖德太子の作といふは當らじと雖も面相手法等より觀察すれば恐らく鎌倉時代の作ならん宮津町內有數の佛體なり。

當寺世代左の如し

中興開基	安正上人	慶長元年申五月十八日示寂	
二世	敎傳上人	寛永七年未十月十八日	
三世	利元上人	元祿十六年未十月六日	
四世	敎誓上人	同　十四年巳九月二十九日	
五世	惠敎上人	享保十八年丑二月六日	
六世	惠海上人	寛保二年戌三月二十九日	
七世	惠乘上人	寛政二年戌十月十六日	
八世	惠深上人	文化十年酉正月二十四日	
九世	惠濬上人	嘉永七年寅十月二十五日	
十世	惠曠上人	明治八年亥四月二十一日	
十一世	惠照上人	慶應四年辰七月十八日（九月八日改元明治元）	
十二世	惠亮上人	明治四十一年申四月四日	
十三世	惠眞上人	現住	

檀徒六十一戸あり、當寺境內和田屏山が經王寺の天井雲龍の落款印章に用ひし父兄の墓碑あること同寺の條に言へり。

丹後宮津志 終

大正十五年三月廿五日印刷
大正十五年四月　五　日發行
（非賣品）
發行所　京都府與謝郡宮津町役場
印刷人　高井辰之烝　岐阜縣稻葉郡長良村字福光二〇七〇番地
印刷所　岐阜刑務所　岐阜縣稻葉郡長良村字福光二〇七〇番地

印刷所　東京市牛込区神楽坂二丁目三番地
株式會社秀英舍

印刷人　高井貞之輔

発行所　東京市牛込区神楽坂二丁目三番地
株式會社秀英舍

（非賣品）

大正十五年四月　五日發行
大正十五年三月廿五日印刷

554
43

終